

ブレインタローの想像力考（中）

細井雄介

**Brentano's lecture on "Phantasie" (continued from Vol. 134) —————**

In the previous issue (Vol. 133) the attractive figure of Franz Brentano (1838-1917) was ascertained as a teacher of both Alois Riegl (1858-1905) and Edmund Husserl (1859-1938). Husserl was especially fascinated with a lecture which contained penetrating investigation of "Phantasie". Surely the content of this lecture is very interesting.

From a viewpoint of aesthetics, furthermore, the problem of "Phantasie" or imagination is seriously important. So, as before, in order not to miss any detail I have translated the whole of the lecture into Japanese here.

The original text is as follows:

Franz Brentano, *Ausgewählte Fragen aus Psychologie und Ästhetik*. in: *Grundzüge der Ästhetik*. A. Francke Verlag, Bern 1959. S. 36-72 (-87).

本稿の目的は後段に置く論考の翻訳紹介である。作業の趣意を明記して本論叢前集(第三百二十四集)では「ブレンターノの想像力考(上)」を掲げたが、同じ体裁で主部「心理学および美学の選り抜きの疑問」を続け、当該部分の「内容概観」を末尾として結ぶ。

ブレンターノ (Franz Brentano, 1838-1917) については本論叢第三百二十三集でレクラム文庫『ヨーロッパ哲学』の短文にもとづく経歴を記した。そのあと経済学の加来祥男教授から思いがけぬ資料をまたも頂戴した。

フランツはドイツ西部ラインラントのボツバルト近傍マリーエンベルク (Marienberg bei Boppard) に生れたが、同年まもなく一家の移住で、育った地はバイエルンのアシャツフェンブルクである。フッセルの「ブレンターノの想出」(本論叢第三百二十三集)に左官として働く印象深いフランツの姿があった。夏用の住居としてドナウ河畔オーストリア景勝の地シェーンビュール (Schönbühl) で往昔の僧院客舎 (Gastehaus des Klosters Melk) を改装中のこととされるが、完成後やがて集う人々には、この地を Neu-Aschaffenburg として紹介するほどに、暖い一家の真の故郷はいつまでも忘れられなかったようである。

弟ルージュ (Lujo Brentano, 1844-1931) は経済学史上の巨星であり、加来教授の関心事はブレンターノ一家の社会的な動向および事蹟にあると拝察するが、お便りでは二〇〇四年のドイツ滞在で当地をも訪ねた折に偶々得た一書の由、頂戴したコピーは簡潔な経歴敘述からはじまるフランツ関連の興味深い逸話群である。だがこの一書全体は市誌を重んじる当市法人作成の得難い資料書と思われるゆえ、書名以下を明記して置く—— Die Aschaffener Brentanos. Beiträge zur Geschichte der Familie aus unbekanntem Nachlaß-Material. Aschaffenburg 1984.

[Veröffentlichungen des Geschichts- und Kunstverein Aschaffenburg e.V. 25]。

本稿末尾の「内容概観」(二九―五二)は講義本体各節の内容を编者 Franziska Mayer-Hillebrand が要説して並べたものであり、翻訳の底本たる原書自体の目次をも成している。本論叢前集第三百四集で述べた通り、すでに全文(一一五九)は畏友森谷宇一教授の綿密な吟味を受けている。前集の「想像力考(上)」については後日、「内容概観」の部分は、本文の大筋をつかむのに大いに役立ちましたが、ときに本文とバランスを欠いている段もあるように思いました」との御感想を得た。確かによく注意して読比べなくてはなるまい概観であろう。なお、この指摘に先立つのは本講義全体の根本的性格をみごと簡明に捉えた一文と思われるので、今後の読解の指針として、お言葉のまま掲げさせていただこう——「いちばん印象に残ったのはやはり、美学を理論的学問 (*Struktium*) ではなく実践的学科 (*Techn*) とする根本的立場です。これはつまりは、ブレンターノ自身も示唆しているように、美学を美論でなく芸術論とみなすものであり、古代にさかのほればプラトンよりもアリストテレスの立場を採るということですが、自然美などを貶下して美学 ≠ 芸術哲学とする近現代美学の大勢にも通ずるものでしょう」。

本稿の主題は Phantasie (想像「力」) の概念であり、アリストテレスからヴントにまで至る批判的概念史である。心理学者としてのブレンターノにとって Phantasie とは Phantasievorstellung (想像表象) のことでもあり、誌面に「表象」の語が溢れるが、日常会話からはやや速い言葉であって、うるさいかも知れない。目障り耳障りであるならば片カナの力を借りてもよろしかろう。Vorstellung は英語では image、動詞 vorstellen 「前に立置く」は imagine、動名詞 Vorstellen は imagination にも当り、「イメージ」や「イメージーション」の響きは今日の日常生活で多用されているからである。

文彩の女王などと言われる「隠喩」については二十世紀中葉にマクス・ブラックの卓説が後続多くの論議を招い

た (Max Black, 1909-1988, *Metaphor*, in: *Proceedings of the Aristotelian Society*, Vol. 55 (1954-1955), のち諸書に収録、一例として Joseph Margolis, *Philosophy looks at the Arts*, (1962) pp. 218-235)。隠喩が日用文章の飾りに過ぎないのであれば哲学にとつては無用の代物なのだが、という問題にブラックは答えたのである。古来の「代替説 (substitution view)」「比較説 (comparison view)」「は双方とも飾りのことを語るのみとして斥け、新たに「交流説 (interaction view)」を立てて、別様の仕方では遂行し得ない認識機能を果すゆえに「隠喩」は哲学にとつても無用どころでない意義をもつ、と明言したのでブラックである。

「人は狼である」を例とすれば、ここには人なる「主要主語」と狼なる「補助主語」という二主語があり、この隠喩はフィルターとして、これを被せると二主語間に交流 (相互作用) が生じ、狼を実際には知らずとも狼を巡る広漠たる常識的連想 (system of associated commonplaces) が主要主語についての認識を特異独得に深める、と言う。事態の簡潔な構造把握を明示したゆえに、注目を集めたのは当然の名論としてよからう。

この構造把握を是認する立場を取れば、時として翻訳なるものが原文よりも含意を鮮明にし豊潤ならしむる事情もよく納得できる。また一訳語がさらに片カナを呼び、これを用いることで両主語が明快さを増すのであれば、片カナ語も大いに利用してよい。

本稿の主題はファンタジーであり、そのイメージのこと、イメージ作りのことである。これらの概念および歴史を検討し了えて、次集にまわす最終段では、はたして人間の生得的能力としての「想像力」は存在するのか、という根本的疑問が立昇ってくる。

翻訳の底本は左記の通りだが、副本として PhB 本を傍に置き、各頁を照合しつつ訳業を進めた。

Franz Brentano, *Ausgewählte Fragen aus Psychologie und Ästhetik*. in: *Grundzüge der Ästhetik*. A. Francke Verlag, Bern 1959, S. 36-72 [-87].

: *Grundzüge der Ästhetik* [PhB 312]. Felix Meiner Verlag, Hamburg 1977.

「心理学および美学の選り抜きの疑問」

フランツ・ブレンターノ

（\*）この位置に前集（第百三十四集）では本講義の出所を語る編者フランツィスカ・マイヤー＝ヒレブラントの注（1）があった。講義が行われたのはウーレン大学一八八五年から八六年にかけての冬学期、初日は一八八五年十月十七日と記入されている由である。

第一第二と二冊ある手稿綴本は編者の手で全五九節の一体に纏められての公刊となった。前集では第一節から第二九節冒頭の一文までを翻訳紹介したが、今集では再度第二九節冒頭から始めて第五一節冒頭の一文末までを掲げる。あとに続ける「内容概観」は公刊書の目次を成すが、講義本体各節の編者による要説である。

訳者

二九、この考察を始めた箇所に戻せば、われわれは美学が心理学に依拠することを指摘したのであった。両者の間柄は、双方へは一緒に広汎きわめて重要な問題が関ってくるような間柄と見えた。美学にとっての意義が最も大きいのは心理学に属する想像力論（Lehre von der Phantasie）である。だが想像力を扱うのに、ほかの事柄、概念的表象と直観的表象との別とか、ことに、想像力が本質的に制約される感受（Empfindungsent）のごとき事柄にも立入らずに済ますことは不可能であろう。こうしたすべては美学にとって最高度に重要であるばかりか、芸術家の生や研究者（数学者さえも）の生どころか各人だれの生にとっても作用広汎な実践的意義をもつ事柄である。したがって表象生活の研究は心理学の最重要課題に属する。無論ただひとつの疑問が生じるだけでなく、多数さまざま

まな問題が提出されるのである。

すでに語ったが、心理学は内的経験（知覚 Wahrnehmung〔真理把握〕）の領域を記述する。また表象の継起や共存の法則をも探究する。そこで記述心理学 (beschreibende Psychologie) と説明心理学 (erklärende Psychologie) とを区別する(両者の間柄はどこか解剖学と生理学との間柄に似ている)。両種の研究が想像力について行われる。残念ながら双方で、たちまち大きな不一致に出合うことから、心理学全般の不完全な状態を思えと戒められる。不一致は想像表象の連続の法則についての教説でも、想像表象の成立や変遷の条件についても見出される。だがこれは決して驚くべきことでない。

説明心理学は疑いなくより難しい部分であり、生理学、また物理学とも緊密に連なるゆえに、説明心理学の不完全性は概念的に理解できる——決して厳密学になり得ないのである。並べると記述心理学はこの依存性から比較的に自由である。生理学がなお萌芽状態にあったとき解剖学はすでに高度に発展していたが、同じことが記述心理学でも考えられるであろうか。いや、そうは行かない。あれこれ重要な点で記述心理学においても見解の大きな不一致が最重要研究者間に見出されるのであるが、これについては詳しくここで立入ることができない。<sup>58)</sup>けれども、この不一致を根拠として高まるかも知れない懐疑の念は、大したことでないと却下してよい。見解の不一致によって証明されるのは、記述心理学にも伴う不可能性でなく、ただの困難性でしかない。

(58) 手稿原文で言及されるのは、心的現象の根本部類についての不一致、判断明証についての不一致、判断と表象との区別についての不一致、普遍的概念についての不一致、等々である。手稿綴本第二冊下記頁 S. 111-129 (H. Fassung) においてプレントナーはまず最重要論争点若干を列挙、つぎにこれらの手短な批判的説明を行う。だがこの説明は直接われわれの対象に触れないゆえ本書では省略した。研究が手稿原文 S. 130 で再開するのは、右の不一致は内的知覚の明



証とどのように合致するかの問を以てである (やや短縮してある)。

三〇、とりわけしばしば聞えるのは、即応明証的知覚 (unmittelbare evidente Wahrnehmung) の領域こそ真先に最もよく認識できるし記述できることは、やはり最初からの期待でないのか、という異論である。

だがこの異論には、内的知覚に誤りのないことは確かであり、内的知覚に入り込まぬ心的なるものはわれわれに体験することができないが、しかし記述心理学にとって肝要なことのすべてが即応明証的知覚を以て尽されはしない、と反論できる。

a. 証拠としてはただ、内的知覚に媒介されない普遍的、法則、すなわちア・プリアリに納得できる判断によって即応的 (unmittelbar 無媒介的) に把握されるか、それとも帰納や演繹、あるいは両者合同の仕方に媒介されて把握されるかいずれかの普遍的、[allgemein 全称的] 法則が存在することを見るだけでよい。記述心理学では諸他の経験科学においてと同様、例えば「いかなる心的現象も客体と関係する」のごとく帰納が主役を演じる。だが例えば「いかなる喜びの根柢にも表象がある」のごとく (概念のそれぞれから納得できる判断たる) 公理 (Axiom) も生じる。

b. だが特称的 (partikular) 判断にとつても内的知覚は十分でない。とりわけ明かなのは、(ここでは記憶 (Gedächtnis 回想) も参与していることである (すでに演繹の助けも要るのは、記憶が明証的ではないからである)。しかもあれこれと説明心理学の命題までもが欠かせないのは、記憶では因果連関が引合いに含まれるからである。他人の経験を利用する際にも、ことは演繹的に運ばれる)。

c. 内的知覚に入り込むものについてすら、即応明証的認識の作用を呼寄せるに及ばない。というのも、内的知覚に入り込むものすべてが気付かれる (bemerkt werden) わけではないからである。

三一、そもそも「気付く (bemerken 注目する)」とはいかなる作用か。

気付くとは見分ける (unterscheiden) ことと言われてきたが、これは曖昧な言い方である。違いを認める (erkennen) ことにも用いられ、それゆえにこそ多くの人々の意見では、気付くとは相違の認識のこと、それゆえ幾つかが同時に気付かれるのでなければできないこと、であった。

知覚されるものすべてが気付かれもするのでないことは確かである。だが気付かれないものは記述心理学にとつて存在しない。こうなると、たとい知覚されても状態全体は明瞭でない。あれこれの部分あり全体にこれら部分の所属していることが気付かれないばかりも同様である。それゆえ記述心理学は、何が与えられていて如何なる事情にあるかを明瞭に語り得るためには、諸々の連関を分析し了えていなければならぬ。これこそが、さまざま気付く (ein vielfaches Bemerken) と「気づく」ことである。

さて無論だれでも少くとも時折は多くのことに気付くが、かなりのことは気付くのが容易でない。例を挙げれば明証 (明証的判断と盲目的判断との別) であり、判断と表象作用との関係様態であり、抽象体における具象体 (そもそも存在するのか、いかなるものが存在するのか) 等々である。さよう、多くのものは全然いつだって気付かれない。例えば (連続的移行が可能な場での) 小さな間隔であり、自分の個性を他人の個性と別けるものも同様である。ほんの束の間しか見えないものも気付かれぬままに終る。

気付くということとは気付かれるのか、それとも、もしやすると「気付きつつ同時に気付かれる (mitbemerkt werden)」のか、これは特別な問である。いずれにせよ気付く (Bemerken < bemerken) という働き「動詞的作用」は、この特別な部分や特異性については気付かれない (そうでなければ明証についての論争など生じないであろう)。さて、ここで気付くという働きの場所へ向けての演繹が登場し、この演繹と類推とがしばしば「気付く」ということを教

える準備となる。

あるものは決して気付かれないのに、あるものは存在するや常に気付かれるのか、これはまた別箇の間である。このことをフェヒナーは苦痛および快樂のことを考えて主張した。けれども反論材料として、合成されて全体なりと気付かれる感情状態内に、気付かれぬままとなる部分現象のあることが顧慮された。

上述のところから容易に納得できるのは、心的現象の記述にはあれこれ隙間の生じることである。かなりの隙間は埋めることができず、例えば個々の相違のあることは確かと認められるのに、どこにあるかが認められない。

また他の領域においてと全く同様さまざまな誤謬の生じることも納得できる——帰納や演繹の作用においてであり、公理と見定める作用においてであり、分析しつつ気付く作用自体を思いながらのことであり、結果として、あるときは全然存在せぬものに気付いたと主張されたり、あるときは明証的内的知覚に与えられていること確実なものか否認されたり、となる。こうした誤謬は、別方面でも誤謬を許してしまう同じ見地が出所と納得できるし、しばしば、ひとが明敏であろうと、どれほど入念な検査を行おうと生起する。不当に何かを假定することが生じ、ひとたび認めた物事に迷うことも生じるのであり、そのさい役を演じるのは、散漫になり勝ちの気持であり、癖であり、愛憎であり、詭弁である。(しかも矛盾律では多くのことがあやふやになっている。)

思込みに誘われ易いことがある——

a. 気付かれないものは存在しないであろう——全力を尽して注視 (aufmerken) したにもかかわらず (恐らく気付くことのできないものゆえに) 気付かれないときには格別、もし存在しているならば気付かれるはず、と思われてしまう (この思違ひには、例えば延長と部分のことについてデーヴィッド・ヒュームですら引つ掛かった)。

β. 区別「相違」が気付かれないところでは、区別は存在もしない。言いかえると、与えられるのは、同等なり、

ということである。

γ. 仲介が気付かれないところでは、与えられるのは即応的结合であろう。そのさい見落されるのは、興味を引かぬ構成員は癖となつて無視されることであり、また（感受における）最小部分に気付くことはできないという可能性である。

δ. 間接に測つても直接に測つたと見えるものがあり、同じと見える大きさは等しい大きさということになる。

ε. ひとの気付くものは、これに注視 (aufmerken) するや注視を浴びないでも（恐らくはただいつでも同時発生の在り方で）存在するし、現存せぬものは、これを注視しようとするごとに消失する、と仮定される。

これら誤れる思込みにはともども雑多な先入見が働く——

a. 間を詰めて連ねたもの（ぐらつかぬ連想で結合せるもの）が、一つの名で呼ばれるならば、これは単一にして単純なるものと思込まれる。

b. 主語を欠く文章における、また選言・仮言・定言の判断における、油断できない言葉遣いの感化は顧みられぬままとなる（すなわち語ることと考えることとのあいだには緊密な平行関係がある、としばしば思込まれる）。

c. また伝来の等級名クラッセにおいて曖昧朦朧となつた意義も同じく顧みられないままである。

d. 必然 (Muss) と当為 (Soll) とを混同する嫌いがある。

e. 明証の度合は注視 (aufmerken) の度合に当る、と思込む。

f. どこで、いつ起きたかは知らずに既知となつたことでは、これを思う連想もこのこと自体に与えられるとしてよい (J・S・ミル)。

三二、これらすべてのことを見ると、あとに記述心理学が残り得るのか、もはや解らないほどである。記述心理学の進歩を今日まで妨げてきたものは下記の通りである——

- 一、とりわけ心的現象に気付く (Bemerken) いて書留める記述 (Beschreibung) についての、特別な習練 (Übung) の不足、
- 二、研究や検査ばかりか他人の説得をも進める方法 (Methode) の不足、
- 三、分業 (Arbeitsteilung) の不足。

しかしながら、これらの不足が克服されて、記述心理学が従前より完全な状態に到達する、という将来への希望は残っている<sup>(59)</sup>。

(59) 本節三二および三二二の手稿原文を、挙げられる諸例についてはとりわけ、やや短縮してある。ブレンターノの書『正判断論—第一部—』(Die Lehre vom richtigen Urteil erster Hauptteil) を参照のこと。

三三、これから没頭すべき課題は想像力についての研究 (Untersuchung über die Phantasie) である。この研究をわれわれは心理学全般の今日なお完全には発達していない状態を一瞥しつつ始めている。何よりも必要なのは想像力の概念 (Begriff) を規定することであろう。概念規定の方法は、問題が術語の新たな導入にあるばあいと、伝承された術語の規定にあるばあいとは、本質的に別である。だがいずれのばあいでも、この課題は多くの人の思うであらう程度より複雑である。

新たに導入したい術語で問題となるのは、この術語を理解させることばかりか、この術語の必要性和有用性を立証することでもある (例えば植物学や動物学で幾つかの徴標を一体に纏めることは、まだ名称の存在しない一自然の綱<sup>ツグ</sup>が問題であることを示している)。したがってここでも絶対的な勝手気儘「恣意的命名」は現存しない。

この勝手気儘は伝承された術語ではさらに通らず、ここでは伝統(Tradition)を顧慮しなければならない。問題は、この術語のもとに私(Ich)が理解するところばかりか、ひと(man)が理解するところをこそ語ることである。しかもこのことが大切なのは学問の最初段階についてであり、後代人の眼前に研究者の手に成る術語があると同じく、創始者の眼前には民族に由来する術語があるからである。言葉を学ぶからには課業によって各人だれでも分類作業(Klassifikation)へ向う。こうしてわれわれに見えるのは、ソクラテスやプラトンやアリストテレスなど、学科(Disziplin)の基礎を本質的に初めて築いた最古の哲学的研究者が、早くも右のごとき疑問を相手にしている姿である。

そしてまさしく想像力(Phantasie ≙ *Phantasia* 表象・想像)については『靈魂論』で、これは *aísthōnōis* (感覺) なのか *dianoia* (思想) なのか、*noēnōis* (思惟) か *prothōnōis* (仮説) か、*doxōa* (私見) か *doxōa met' alōthōnōis* (感覺を伴う私見) か、等々と問われているのが見える。<sup>(6)</sup>

(6) Aristoteles, *Περὶ ψυχῆς*, III 3.

三四、さて、このような局面では何を為すべきか。

アリストテレス(先んじてソクラテスやプラトン)の教えたように、以下の作業が有益である。

- a. さまざまな使用例の枚挙
- β. 諸例に共通なるものの研究
- γ. 諸他見解の枚挙と研究
- δ. 諸結果の比較

このような仕方ですべてに共通なるものに達することができし、できなければ見出せるのは、共通なるものが諸例にはないこと、言いかえれば、われわれはあれこれの曖昧を相手にしなければならぬということである。けれども、これで課題は尽されていないどころか、なおすべき重要なことが残っている。伝承を顧慮せよ、との要請が求めているのは無条件の伝承固守でなく、ただ、伝承からは軽率気儘に離れないようにということだけである。しかし伝承の固守はしばしば不可能もしくは不利益であろう。このことは曖昧な事例で起るが、ひとつの名称の輪郭が溶暗的にぼやけてくるときにも当嵌る(無論ときに輪郭のぼやけた術語は許容されるばかりか必要ですらある)。だが一貫して精密に用いるばあいにも当嵌る。思出すのは、術語を新たに導入するさいの概念規定について語ったこととである(ただ語の意味の規定だけでなく、名称を必要とする一自然の綱クラウが目の前にあることの証明も大切になる)。

すでに民衆言語「俗語」の歴史でも語義は変化するのが見えるし、学問の歴史においては尚更のことである。学問が若ければ若いほど、それだけ頻繁に術語の意義の変更が必要となるのは明かであり、そのような変更が熟慮のもとに行われ、こうして決定的な進歩の成るのが見えるが、これは従来語の境界が自然でなかったと判明し得ることである。だが、いかなる意味親近性をも見せぬ粗雑な変更など減多にないし、ほとんど得策でもない。それでも観察できる外見の学問的親近性についての見方が変わるにつれて、何ほどか術語の境界に推移が生じるのはあくまでも許されている。

今日なお若い学問と呼んでよい哲学(ことに心理学)においても、引継がれた術語を吟味するという、この、いかなる概念規定でも課題となる部分は大いに顧慮しなくてはならない。<sup>(61)</sup>

(61) 前節三三および本節三四は大幅に短縮してある。

三五、さて、ただいま述べたことをわれわれは、Phantasie (想像「力」) の概念規定でも適用に努めたい。

まず最初に想像なる名称の、これまでの使用例を吟味すべきであろう。表面的に片付けてよいだけの安易な仕事でないことは明かだが、このような研究は実りが大きいと実証されるであろう。生活内 (E. Leben) の使用例をも研究の場 (beim Forschen) での使用例をも考慮に入れるが、まずは前者を扱うことにする。容易く認められるが、想像の名で理解されるのは、あるいは素質 (Anlage)、あるいは活動 (Betätigung) である。われわれは後者の種類、活動の事例だけに注目する。

という次第で見えてくる使用例は想像表象 (Phantasievorstellung)、なる意味における想像 (Phantasie) である (判断 Urteil や心情活動 Gemütsätigkeit は扱わない)。それでも当の使い方はさまざまであり、以下のごとく考えられている

a. 感受 (Empfindung) であることはないが、感受の表象と何らかの親近性をもつと見える表象のこと。これを感官の別により一群ごとに区別する (視覚の想像表象、聴覚の想像表象、等々である)。これを感受そのものと呼ぶのは何故か、これが感受から区別されるのは何によってか、と問うならば、いかなる点においても満足できる回答を得るのは容易でなからう。感受のもとに理解されるのは外的対象の作用によって成立する表象であり、このことが想像表象では当たらない、などと言われるのである。

b. いわゆる一般人は表象成立における相違以外におひとつ別の、より記述的な区別、すなわち想像表象には生氣 (強度) が乏しいという区別を申立てるかも知れない。そのくせ他のところでは当の想像表象なる名を、右のごとき差は示さぬ表象、例えば高熱による想像とか種々の幻覚などに与えているが、これらは決して強度が弱いと性格付けられるものでない。



c. この一般人に残像 (Nachbild 網膜上の) はどうかと尋ねると、折々、これまで全く気付いていなかったことが解るし、これをどこへ入れてよいのか定かでないに見える。

d. ところが別の例では迷いもせず、夢は想像表象に入れている (Traumphantasie 夢想像)。

e. 記憶や予期に見るごとき過去や未来のものとしての色や音の表象をも一般人は想像表象に入れるであろう。それどころか恐らく、この種の何らかの表象は感受と思うか、それともすべて想像心像 (Phantasiebild) と思うか、と問えば、想像心像であると決めることだろう。無論そのさい一般人は幾たびも首尾一貫性に欠けたままである。例えば、運動を見る、演説や話し言葉を聴く、旋律、少くとも一節の旋律を聴く、などと言張るようである。このとき矛盾に気付かせるや、恐らく、確かに運動はどの部分も同時に全部は実現しないと認めるであろうし、運動を知覚すると言つても非本来的な意味においてのことではないとの意見に同意するであろう。

f. いわゆる外的知覚の表象と並んでわれわれには、内的知覚 (innere Wahrnehmung) の所為にする表象もある。こうした表象を想像表象に入れるかと問えば、入れないと俗人はきっぱり否定するであろう。

ところが、一体、色や音などの感受には当の色や音などの、いわゆる記憶像また類同的としてよい予期像が起るように、内的知覚の表象にも起る表象はないのか、そしてあるいは、例えば私が誰かに、むかし私はあれを望んだ、この信仰を懐いた、ある悲しみを覚えた、等々と伝えたり、また近々ある一事を捉えて考え抜くつもり等々と伝えたりするとき、こうした表象は想像表象に算えられるのではないのか、と問うならば問題は別となる。——言われる通りと俗人はほとんど躊躇もなく認めるだろう。しかし即座にこうした表象を想像に入れてしまい勝ちにもなるう。(だが同じことは音楽的想像活動だけでなく詩的想像活動をも語るばあいに絶えず行われていると見える。)

g. 相似たことは他人の心的現象 (psychisches Phänomen) の表象についても言える。

h. これまでの例とどこか異なるのが、もはや受身に捉えられる表象ならぬ本来的意味における活動 (Tätigkeit) が想像 (Phantasie) と呼ばれるべきである。「移入的想像活動 (Hineinphantasieren) 向うに入つて想像を働かす」と言うが、いわゆる幻想 (Illusion) もここに属している。

i. 相似る弱い種類の例もある。例えば一枚の絵に色を入れて想像を働かせたり、あれこれの線から板に描かれた人物を想像したりのことである。上手な棋士は盤上さまざまに変る駒の位置を思描いている。

j. なお一例あり、これについては何か似たもののはせぬかが問題となり、ここで想像活動 (Phantasietätigkeit) についてあれこれ語られる——例えば壁掛けを見てのことであり、雲や星々を見てのことである。向うがわに入つて見て取れる形式は、しばしば、想像の戯れ (Spiel der Phantasie) として説明される。<sup>(62)</sup>

(62) この種の想像活動を調べるためプレンターノは自分で拵えた図を用いたが、これは人格深層の研究で今日多大の役割を演じているロールシャハ検査の図板と相似っていた。本節三五はやや短縮してある。

三六、これまでを顧みると共通項として立つのは、表象でないものは、想像に算えられない、ということである。だが感受の表象や知覚の表象に属するものは想像と呼ばれず、他方で抽象的概念たるものも想像と呼ばれない。大切なのは具体的<sup>(63)</sup>表象もしくは、そのような表象と思われるものにある。それゆえ多く語られるのも研究者の想像についてよりは詩人の想像 (一般的には芸術家の想像) についてであり、それというのも直観的にして具体的な表象の形成こそは勝れて芸術的な作業であると信じられていたからである。

(63) けれどもプレンターノ後段の詳解に見えるが、「konkret (具体的)」なる語のもとに理解されるのは、個々別々 (individuell) に特定される表象でない。本考(下) (底本 S. 81ff.) を参照のこと。

三七、ここかしこと実情 (Tatbestand) の誤れる把握がありはせぬか、さらに、われわれはすでに「想像なる」自然的部類 (natürliche Klasse) を与えてしまっているのか、と疑問が出る。これはなお研究すべき事柄なのである。とにかく平俗の人々が勝れた、(eminent) 意味における想像、いわば当の典型と見做す種々の出来事 (Erscheinung 外見) のなかには、外的知覚に似ていて幻覚 (Halluzination) の類に入るものが挙げられる。

三八、それでは、どのように研究者 (Forscher) は想像を掴み、何を想像と算えているか、の探究に向おう。しかしここでも扱うのはただ、研究者が想像活動 (Phantasieaktivität) について語っていることだけに絞り、この活動の素質についてしか語っていないことは入れない。

a. そのさい、研究者の顧慮しているのが上述の全事例か、それとも若干例か、あるいはなお他にも例を挙げないか、と注意しなければなるまい。

b. さらに、想像の概念を研究者が一義的 (univok) と捉えていたか、多義的 (equivok) と捉えていたかが問題となり、後者であれば、多義的とは偶然によるのか、本来の意味で想像と呼ばれるものとの類推ないし関係によるのかが問われる。

c. 想像の概念を研究者は精密 (präzis) な概念と見たのか、溶暗的 (verschwindend) (すなわち語使用に精密な境界なし) な概念と見たのか。

d. 記述的 (deskriptiv) にか系統発生史的 (genetisch) にかの区別は立てたつもり、と研究者は思っていたか。

だがわれわれにとって重要なのは、研究者が、想像なる名称をどのように用いたかということ、よりむしろ、諸他一切の現象とは別に特定部類現象 (Phänomen) の区画を欲していたか否かである。

(64) すなわち哲学者ないし心理学者のこと。

三九、われわれの見る筆頭の人はもちろんアリストテレスであり、心理学の祖としての見解は格別に興味深い。  
*Phantasia* (Phantasia 想像、等々) なる語をアリストテレスは早くも学問的術語として用いている。

植物成長の栄養的機能は問わないとすれば、生命活動をアリストテレスは二重の領域に別ける——感性的 (sensitive) 機能と知性的 (intellektiv) 機能とである。知性的機能に算えるのは概念を考へる思考 (Denken) およびここから作られる判断 (Urteil) であり、また高次の欲求作用 (Begehren)・意欲作用 (Wollen) であり、こうした活動すべてが掴む知覚 (Wahrnehmung[en] 「真理把握」) である。感性的活動の内部には、まず欲求作用 (Begehren 何々を的として狙うか) で感性的な不快も顧慮される (と感覚像を掴む把握作用 (Aufnehmen 「手触りの次元」) とを区別する。しかし感覚像の把握作用 (Erfassen 「本質を思う次元」) が生じるのは、ひとつには目の前の感覚的物体 (Objekt 客体) から当の感覚的部分が好まれる (つまり、ひとつが効果 *Einwirkung* を受取る) ゆえにであり、このとき感受 (Empfindung) が成り、ひとつは物体のこのような効果がないばあい、このとき想像活動 (Phantasietätigkeit) が成る。それゆえ出来事 (外見) としての想像 (Phantasia) と感受 (Empfindung) とは最内奥において類同である。想像が感受と異なるのは、ただ、感受は眼前なる感覚的物体の効果の帰結だが、想像は土台が以前の感知 (Sensation[en]) にあること、よってでしかない。敏感 (sensibel 感じ易い) な物体の生む運動 (Bewegung) は、他の作用が加わらなければ、同じ運動をさらに継続する (運動をアリストテレスは一突き後に続く前進と比べている)。また運動は器管内に存続性向 (bleibende Disposition[en]) をも残し、この性向ゆえに事情次第で以前の感じ易いものの像 (Bild) が甦るが、しかしこの心像は後日の作用 (Nachwirkung) として以前の心像より弱々しい。

右に述べた二つのばあいでは前者を重んじて、アリストテレスも視覚の想像表象、聴覚の想像表象、等々を区別する。また平俗人と同じく「弱さ」の別、つまり強度 (Intensität) や生氣 (Lebhaftigkeit) の強い弱いという記述的徴表を知っている。だが高熱による想像 (Fieberphantasie) をも幻覚 (Halluzination) をも挙げています。その際なお、ひとがこれに気付かないのは興奮しているか比較を忘れてるときでしかない生氣というものの相違を信じていると見える。また残像 (Nachbild) にも顧慮して (自身の定義を守り) これを想像表象に算えている。さらに夢のなかの姿 (Traumbild) と幻覚 (Halluzination) との親近性を認めている。<sup>(65)</sup> 過去や未来のものとしての色の表象、音の表象、等々について言えば、記憶像をも予期像をも想像表象に算えていることは確かである。<sup>(66)</sup>

(65) これらをアリストテレスは運動の名残 (Residua) と見ていた。他の関心に圧されて目立たなかった関心が後日、  
 またもや目立つ、としてよい。

(66) これらすべてはとりわけ『靈魂論 (περί ψυχής)』第三巻に詳述されている。手稿原文をやや短縮し、長文の  
 ギリシア語引用は省略した。

けれども、時 (間) は知覚されるし、しかも過去の終結にして未来の開始たる境界としての Jetzt (今) の助力で知覚される、と見るのがアリストテレスの見解であったと思われる。ことに、時間内に更代が生じれば変化が知覚される、と考えていた。<sup>(67)</sup>

(67) 『自然学 (τά περί φύσεως)』第四巻における時 (間) の定義を挙げる——ὁ χρόνος ἀριθμὸς ἐστὶ κινήσεως κατὰ τὸ πρότερον καὶ ὕστερον. [219<sup>a</sup>1] (時は前後に動く数である)。

無論この見方は満足できるものでなく、「普通人」の見方においてと同様さまざまな矛盾が生じるが、しかしここでは、こうした矛盾に立入ることができない。<sup>68</sup> 時（間）や運動などの知覚表象は考えられないこと、ここに真の解決は見出せるのであろう。<sup>69</sup> われわれにとって重要なのは、何ごとであれ過去や未来のことを思う傾向には想像を通してしか近付けない、ということである。ただし、以前の印象の忠実な反復だからとて、これだけですでに想像のあらゆる像（Phantasiebild 想像心像）が過去の像として現れるわけでないこと、に注意しなくてはいけない。

(68) こうした難点をフレンターノは以下のごとく示唆する――

一、連関のない二点があるとき、どちらからどちらへと更代が生じるのかは確実でない（逆方向にも言えるであろう）。

二、運動における継続的变化に立合うとき生起しているのは二体でなく一体である。

三、ゼノンのアポリアへの反論としてアリストテレスは、一瞬間内に休止（あるいは運動）は生じていない、と語ることができた。それゆえ休止をどのように知覚できるのか、と言うのである。

(69) フレンターノによれば時間差（temporale Differenz[en]）について大切なのは表象作用（Vorstellen）の相異なる様態（Modi  $\wedge$  Modus）である。著書 *Psychologie vom empirischen Standpunkt* (Band II) [PhB 193], Anhang III を参照のこと。さらに詳しくは、時（Zeit）についての未刊論考内の教説で論じられている。

アリストテレスは内官（内的知覚）の幻影（Phantasma）をも認めている。ただし必ずしも内的知覚いずれもの部類<sup>クラッセ</sup>に想像表象が呼応するのではない。知性的能力の機能は感知（Sensation[en]）によっては知覚されず、認識（Erkenntnis）とどう仕方で一緒に把握される——それでも序<sup>オビ</sup>（*katá touxéphanos* 付带的）のこととして感覺的想起力（sensitives Gedächtnis）を語っている。何と解り難い<sup>にく</sup>教えか！

他人の心的現象を思う想像表象について問えば、右と同様の区別をアリストテレスは立てたでもあろう。他人の知性的現象の表象を本来の想像はもたないが、感性的現象の表象はもつとしてよい。だがこのときわれわれは推測を頼りにしている。

なかへとり込んでゆく想像作用 (Hineinphantasieren) をも認めたに違いない——幻想 (Illusion) にはなくとも、感知 (Sensation) と想像 (Phantasie) 双方にとつての活動範囲は共通するゆえに幻覚 (Halluzination) にも、また普通の想像表象にもである。しかしこうしたすべてのことは細部にまで仕上げられていない。

振返って比べると、アリストテレスの教説は実質において今日なお平俗の人々の知る教えに合致する、と言わなくてはなるまい。想像はつねに表象と結ばれる。想像の概念は一義的 (univok) である。想像表象は感受と同じく感覚的 (直観的 anschaulich) 表象として把握される。想像表象と感受との相違はとりわけ系統発生史的 (genetisch) しかも精密 (präzis) な相違である。感受では効果を發揮する現在物体 (Objekt + 客体) が与えられるが、このような物体の作用効果が想像では現存しない。<sup>70)</sup>

(70) 本節三九は短縮してある——手稿綴本第二冊と並べて第一冊をも用いた。

四〇、スコラ哲学者、わけでもトマス (Thomas Aquinas 1225?-1274) はアリストテレスの影響を示している。こゝに感性的生命活動と知性的生命活動との分離がアリストテレスにおいてと同様と見える。あれこれと継続したり変更するところではアリストテレスの難点との連関が注目値する。トマスは感知 (Sensation) のほかに三部類クラッスを立てる。——

一、imaginatio (想像力) すなわち phantasia (空想力)

二' vis estimativa (査定力)

三' vis memorativa (記憶力)

感知 (Sensation) は実在 (real) する形式を掴み、こうした形式を想像 (Phantasie oder Imagination) が保つ。いわば想像は感官が受取った諸形式の宝庫である。だが査定力とは独自に見積る判断作用の力である (例えば動物は査定力によって食物に害がないか益があるかを見定める)。

記憶力と査定力との間柄は想像力と感知との間柄と同様である。<sup>71)</sup>

さて右の区分は到底きわめて称讃に値し啓発的であるとは言えないが、それでも感知と査定力との分離では、あるいは、表象と判断とを別ける必要が主張されているのではないかと思われる。しかしこの点についてさらに思索しても無益であろうし、長く留まっても手に入るのは歴史的興味でしかあるまい。

いかなる表象群をトマスが顧慮したのか見究めたいと望んでも、まず何ひとつ期待はできないであろう。まさしく、すでにアリストテレスの注目しなかった表象群はないのである。けれどもトマスが、内的知覚に應える想起の出来事 (外見) と外的知覚に應える出来事 (外見) とを、きわめて明確に見分けて、両者は結ばれていると思っいることは述べておいてよからう。

(71) Thomas Aquinas, *Summa totius theologiae*, Pars I<sup>a</sup>, Quaestio 78 et 79.

四一、アリストテレスの感化は中世を越えるまでに及んでいる。自立度の高まる思索は近世ではまずフランス人およびイギリス人に現れる。デカルト (René Descartes, 1596-1650) は心的な出来事を表象と判断と心情活動とに区別した。想像力 (Imagination) を問うならば、感覚像としての想像 (Phantasma) は思想 (Gedanke) から別けられ、



感知 (Sensation) と一緒に置かれる。<sup>(72)</sup> このことは依然アリストテレスの教説とかなり和合する。

(72) 脳で受取られた印象へと向いつつ感覚像としての想像 (Phantasma) を精神が把握する。Arnauld, *Logica sive Ars Cogitandi*, I. 1.

ロック (John Locke, 1632-1704) ではわれわれの間についてはほとんど何も見出せず、時折聞えるのは、追憶像は鮮かでないのが常、という言葉である。

これより意義の大きな逸脱はヒューム (David Hume, 1711-1776) に見られる。すでに表象の根本的区分が異なっている。ヒュームは *impression* (印象) と *idea* (観念) とを別ける。観念が往昔の想像 (Phantasma) に代ると思われる (強度や生気の乏しい印象が観念と呼ばれる)。アリストテレスでは想像 (Phantasma-Ideal) と感知 (Sensation-[impression]) との別は主として系統発生史的 (genetisch) な違いだが、ヒュームでは両者の強度差が本質的なことである。ここになお副次的に、観念は印象の模像 (copy) であることが加わるものの、観念と印象との別は厳格に一貫しては保たれない。諸他あらゆる出来事がごちゃごちゃに混ぜ合されている。物的現象と心的現象との別なく、認識的活動と欲求的活動との別なく、感性的認識と知性的認識との別がない (普遍的概念は否認される)<sup>(73)</sup>。この教説の難点と首尾一貫性のないことについて、ここでは立入らない。しかし印象と観念との (強度という) 相違にも消滅の虞があるのは、後段になってヒュームが、眠っているときや高熱のときなどの特殊状態では、観念は感知 (sensation [Empfindung] の英訳語の一つ) の生気に近付くと認めているからである。——したがって観念 (あるいは想像心像 Phantasiebild と言ってもよからう) とは一義的 (univok) ではあるが輪郭のぼやけてくる溶暗的概念であると見える。

(73) David Hume, *A Treatise on Human Nature*, I. 1739 [-1740]: *An Enquiry concerning Human Understanding*.

## Part I, 1748.

スコットランド学派哲学者ではリード (Thomas Reid, 1710-1796) やブラウン (Peter Brown, 1669-1735) ばかりかハミルトン (William Hamilton, 1788-1856) においてすらアリストテレスからの徹底的逸脱はほとんど見られず、無<sub>論</sub>と<sub>り</sub>わけ言及に値することもない。ただリードの言葉だけが全然興味なしとはできないであろう。リードは、われわれが時間の観念を得るのは追憶 (memory) からである、と教えた。持続には有限の間隔あり、この概念および信念がわれわれに生じるとしてよからうが、この概念および信念をわれわれは、無限を目指す精神活動によって拡大する。このことに照してリードは、時 (間) の定まった表象をすべて想像の所<sub>せ</sub>為<sub>い</sub>にしている。<sup>(74)</sup>

(74) Thomas Reid, *Essays on the Intellectual Powers of Man*, 1785, *Essay III. of Memory*.

これではほとんど新たなものが出ていないとすれば、それだけ多くのことが別なるスコットランド出の心理学者に見られる——ジェームズ・ミル (James Mill, 1773-1836) である。Imagination (想像) の語をミルはヒュームよりも狭く idea (観念) の連鎖に用い、こ<sub>う</sub>して古い意味での Phantasia (想像) に近付く。けれどもアリストテレスの教説からの逸脱はヒュームにほとんど劣らず甚しい。ヒュームともども普遍的概念は否認し、あらゆる精神的活動は二部<sub>ツラ</sub>類<sub>ス</sub>に別ける。しかしヒュームは印象 (impression) と観念 (idea) とを別けたのに、ミルは感知 (sensation) と観念 (idea) とに別けている。ヒューム同様アリストテレスの根本的区分は抹消し、物的現象と心的現象との区別をも消し去る。ミルによれば sensation (感知) と idea (観念) との境界設定は系統発生的 (genetisch) な事柄で、sensation (感知) は外的物体 (object 客体) による感官の刺戟ゆえに生じる。当の物体 (客体) が遠去か<sub>つ</sub>た後にも

何かが残るが、これが feeling (感情)、すなわち sensation (感知) の結果である。feeling (感情) は sensation (感知) から別けることができるが、別物であり得るにしても、何より sensation (感知) と相似している。この feeling (感情) が模写コトイとか像とか観念とも呼ばれる。相違は生気の差にある。<sup>(5)</sup>

(75) James Mill, Analysis of the Phenomena of the Human Mind [1829], 1878. Vol. I, Chapter II, p. 51ff.

時(間)については、時(間)の概念は追憶から与えられるというリードの所見をミルは、どこか軽蔑の気持もないではなしに斥けている。

イギリス人についてはなおペインに J・S・ミルをも手短に顧みてよからう。二人の傍ら経験 (empirisch 感知体験) 的心理学第三の星としてスペンサー (Herbert Spencer: 1820-1903) もよく挙げられ、確かに二人の長所にやや与する人だが、ペイン、ことに J・S・ミルには及ばない。それゆえスペンサーにはさほど立入らなくとも実質的な空隙とならない。

さきに語ったがヒュームおよびジェームズ・ミルはアリストテレスの根本的区分を抹消した。二人は impression (ないし sensation) と idea から始めた。これはペイン (Alexander Bain, 1818-1903) がないが、やはりアリストテレスの区分はペインでも消えて別の区分に取換えられた。ペインはあらゆる心的機能を、感じる、欲する、考える (すなわち知性 understanding) に別ける。感情 (feeling) に属するのはあらゆる快あらゆる苦痛だが、つづけて快不快どちらでもない興奮のあれこれを算えて、この部類ツラナスには実際のところ sensation (感知) および emotion (情動) と呼ばれること一切を含ませている。意欲に算えるのは、食べる、行く、建てる、語る、など感情に導かれる行動のすべてであり、何か目的を指指しての行動である。知性すなわち思考のもとに捉えているのは三機能、区別すなわち

差異の意識であり、相似すなわち合致の意識であり、保持すなわち追憶である。われわれにとって大事な部類たる idea (観念) は知性 (Verstand: understanding, 理解力) のもとに属しているのが見える。idea (観念) は更新された感情 (renewed feeling) しかも更新された感知 (renewed sensation) としてよい。時折バインは emotional idea (情動的観念) についても語っている。<sup>(6)</sup>

(7) Alexander Bain, *The Senses and the Intellect*. London 1894. *Intellect*. Chapter 1.

sensation (感知) と idea (観念) は多くの点で original (原物) と copy (模像) さながらに見てよかろうとバインは強調する。idea はたびたび同じ職務を果せるとしてよいし、sensation と idea とは強弱の度合が異なるとしてよかろう(強度が大いに劣るのは idea である)。感官の客体が複雑なばあい、sensation と idea との区別は充実の大小よっての区別であり、最後なお付加えて sensation には客観的實在性が具わるが idea はあくまで主観的である、と言う。sensation と idea とは相互に強め合うことができる。時(間)の概念は筋感覚ないし感官印象に分解可能(当然このような仕方でも分解)で、こうした感覚ないし印象を時(間)であると連想する、とバインは推測する。けれども過去のものの未来のものを思う表象はすべて idea に属している。

精しい批評に立入らずとも、誤れる根本的区分の帰結によってバインの教説は痛手を受けていると評してよい。しかもひとつの部類クラッセに属する現象 (Phänomene) の内的親近性を証明する試みは行われていない。バインのばあい idea は確かに「義的 (univok) だが、あとの差異は大体のところ系統発生的 (genetisch) である。[sensation と idea とを別ける] 強弱の徴標は溶暗的に消えてゆくものであり、系統発生史 (Genesis) から見ても idea は中間的形像 (Mittelgebilde) である。

J・S・ミル (John Stuart Mill, 1806-1873) は心理学的問題には稀にしか関わっていないが、しかしこれまで名を挙げた哲学者よりも比較にならないほど高い位置にある。多くを父の教説から得ていることを明すのは、心的現象と物的現象との区別がはっきりとは引出されていないことだが、それでも区別の糸口は判然と見出せる。心的現象について列挙するのは主要な三部類<sup>76</sup>、表象作用 (Vorstellen) と確信作用 (Glauben) と心情活動 (Gemütsätigkeit) である。表象は一部は知覚表象 (Wahrnehmungsvorstellung) 一部は観念 (Idee) である。抽象的で普遍的な表象をJ・S・ミルは知らない。知覚表象と観念とのあいだには系統発生史的 (genetisch) な相違がある。さらに生氣 (強弱) の相違が加わる。しかし父のばあいとやや捉え方は異なり、相違は溶暗的に消えてゆくものと思われる。観念はもとも必ずしもすべてが sensation (感知) の copy (模倣) ではない。一種の心的化学 (psychische Chemie) が考えられるが、例としては延長のばあいであり、時 (間) のばあいも好例である。<sup>77</sup>

(77) John Stuart Mill, System der deduktiven und induktiven Logik (A System of Logic, ratiocinative and inductive, 1843), deutsch von Theodor Gomperz, I. Band, Erstes Buch, besonders Kapitel III.

imagination (想像力) の語をサリー (James Sully, 1842-1923) が idea (観念) 形成の能力と同義に用いている。このことを指摘して、想像 (Phantasie) の概念に関するわれわれの疑問について、イギリス哲学者の占める位置を探る調査は終了としてよからう。<sup>78</sup>

(78) 本節四一は大幅に短縮してある。

四二、ここからは近年のドイツ哲学者に目を向けたい。まず誰よりも顧慮されるのはヘルバルト (Johann

Friedrich Herbart, 1776-1841) であり、ヘーゲルの頹廢哲学 (Verfallsphilosophie) に力強く反対したことが決定的な功績になる。影響は自身の学徒圏内をはるかに越えて、ロツツェ (Rudolf Hermann Lotze, 1817-1881) やヴント (Wilhelm Wundt, 1832-1920)、ある点ではフェヒナーにすら認められる。無論この影響がつねに利益であったか、私には疑わしく思える。すなわち精確に哲学 (exakt zu philosophieren) したいとの善き意志および烈しい願望にもかかわらず、ヘルバルト自身がヘーゲル哲学の雰囲気に捲込まれているのである。

われわれは、誰ひとり自分では経験していない事件のことをあれこれと聴くし、言いかえると作り話の国にいたのでないかと思う。そこでは「心の自己保存 (Selbsterhaltungen der Seele)」に他ならぬ表象が語られるのだが、この語りに私は何の意味をも結付けることができない。さらに表象されない表象についても語られるが、これは私には、思考内容なき思考 (「無」なる存在者の概念) というヘーゲルの命題の堂々たる片割れであると見える。こうした表象されない表象に励む努力についても聴くが、これを誰かが自分で経験できるか可能でない。また対立し合う表象同士の自己一制御のことも語られる。同時に表象される諸々の表象は、心は単一であるがゆえに、一箇の統合表象へと融合させるという。——さらに聴えてくるのは統覚であり、内的知覚であり、感情、欲望、等々、いずれも知れ渡っていて、整然たる思想を呼起す表現である。しかしこれらがたちまち意外な仕方で格付けされ、あれこれの過程と一緒にされて、この過程のもとでは何ひとつ、ではなくとも当の思想と織込まれるものはひとつも表象できなくなる。<sup>(62)</sup>

(62) Johann Friedrich Herbart, *Schriften zur Psychologie; Lehrbuch zur Psychologie; und Psychologie als Wissenschaft*, Leipzig 1850.

この教説はしばしば私に、個々の流れでは確かに現実を思出させても、たちまちまたも現実性の法則は嘲り笑う支離滅裂な夢の印象を与える。あれこれの数学的演繹には、現実的事態にとつての意義を当の演繹に与えることにもなろう経験的 (empirisch) 根柢が欠けている。残念ながら多くの人々は、これほど多く数学的な厳密さが見えるからには精確な学問が与えられているに違いあるまいと思つた。ここから説明できるし、また教説の出てきた時代の精神から説明できるのが、これほどにも永く行われてきたヘルバルト教説の支配力である。

ここでも批判的論評となれば立入ることができるのはわずか二三の命題に過ぎない。ヘルバルト心理学の最も重要な点のひとつは、心の諸能力を拒斥していることである。アリストテレスは早くも、そして以後カントに至るまでの心理学全体は、心の能力は幾つもあることを教えてきた。このことをヘルバルトは絶対的に排斥すべきである。と見て、心の能力は実体化され、人格化され、神話化されるでないか、との過度の非難を浴せているが、これ以上に尤もなこととしてヘルバルト自身には、ヘルバルトは表象を物体のごとく扱っているでないか、との非難を返してよからう。

だがヘルバルトの非難は當つていないばかりか憤激もおよそ正しくない。心の能力についての教説にはあちこちと間違つた見解が混入したが、教説それ自体の普遍的性格は当の混入の責任を問えるものでない。正しく解すれば、教説それ自体には全く反対することができない。

およそ心の能力には一体なにか考えられるか。——自然には、何らかの事物が何らかの状態のもとで何かを引起したり何かを蒙るさいに従う法則がある。このことが当の事物を別の事物から区別する。このことにわれわれは当の事物独自の特質を認める。常にはなくともしばしば、当の事物が知られるのはただ、関りある出来事が規則的に現実的に登場することから当の事物を推論してのことではない。こうなるのは、根柢としての自然から帰結と

しての出来事を予見するには、事物の自然「本性」を深く見抜ける力が、われわれにはあまりにも少ないことから説明できる。

したがってわれわれには、自然は何であると語ることができない。けれども、事物はこうした自然「本性」のものであるゆえ、他のものとは区別して、この事物にはこうした状態のもとではこの出来事が結付く、と語ることができる。ここに見られる特性 (Eigentümlichkeit) が能力 (Vermögen) と呼ばれるものであり、二つの部類が区別される。

一、作用 (wirken) する能力 (例えば重力なる力 Kraft) と、

二、甘受 (leiden) する能力 (例えば場所移動の素質 Fähigkeit) である。

力 (Kraft) については多面的に活動できる可能性が即自的にも対自的にも存立する。このことが素質 (Fähigkeit) である。についても同様とは言えない。同じ物体が同時に逆方向へは動けない。一箇所に存在するならば別箇所には存在しない。相似たことが形態 (Gestalt) 等々についても言える。

比喩的な言回しをあまりにも文字通りには受取らず、素質とは現実で一杯になる器のごときものと思っていたときには、右の事情に何の異論も出なかった。当の言回しを少し前まで物理学者はためらいなく用いていたし、ごく最近ようやく懸念が表に出たものの、これは分析も不十分なためにでしかなかった。そのような疑惑にもかかわらず比喩的な言回しは、用いるのはみごと目的に適うことでもあり、厳禁とされた語り方へと戻っている。なればこそ心理学では、能力や力や素質の語を用いても何ら非難の声はない。だがわれわれの説明はまだ完全でない。「素質 (Fähigkeit) 才能」とは、何らかの状態のもと (事物の作用で) 何かを蒙り、おのずと経験するさいの法則を表す語だが、こうした状態は一部類あれこれの現実態にとつては種々さまざまであるから、もともと部類のいずれにとつ



ても別なる素質が存在する。だが例えば場所 (Ort) のごとき一事物へ向う素質の現存するところでは同種の他事物「場所」へ向う素質も現存すると言えるのだから、このことが、当の素質をひとつの纏まり (Einheit 一者) と解するようになされる。より精確に言えば、こうしてわれわれは素質 (Fähigkeit 才能) と性向 (Disposition) とを別ける。部類全体について言えるのが素質であり、個々の分肢それぞれについて言えるのが独自の性向である。(例えば、どこかに存在 (irgendwo zu sein) できる素質と、どこかあそこ)に存在 (hier oder dort zu sein) できる性向とである)。性向は交替しても素質は同じままに留まり得る。性向は先天的 (ursprünglich) 性向と後天的 (erworben) 性向とに別けることができる。そして素質と呼ばれるものは性向に帰属する<sup>(8)</sup>。

(80) プレンターノ後年の教説によれば、能力・力・素質、等々の語で扱われるのは擬制 (Fiktion 虚構) である(下記)の書を参照のこと—— Die Lehre vom richtigen Urteil. Erster Hauptteil B und C)。もとより本書でも以下すでにプレンターノは、実在的実体 (reale Entität) は現存する、との仮定を却下する。かかる擬制は実在的表現を単純化するゆえ合目的的「好都合」としてよからうが、しかし考えられるものはつねに実在者 (Reales) つまり事物 (Ding) だけでしかない。(81) 性向 (Disposition) は「こ」で今日慣用の語法とはやや異なる語義で用いられている。生れついでに素質 (Anlage) としての性向は、習練により獲得される才能 (Fähigkeit 素質) から一層鋭く別けられるのが普通である。また「こ」かあそこ)に存在 (hier oder dort zu sein) できる性向」とは、ほとんど言われもしない。

これが大体はすでにアリストテレスに見られるような、心の能力について誤りなく形成された教説である。もとより副次的な欠点はアリストテレスにあるし、後人では一層多くなる。欠点が生じるのは——

一、能力・力・素質、等々を実在的実体と見做すときであり、

二、こうした呼名で当のものの實在的條件の本性 (Natur) を露わにしたと思うときであり、  
 三、法則の一層精密な規定作業を怠り、心のあれこれの能力について終にそれぞれの法則を完全に見失うときであるが、能力がまともな意味をもつのは、こうした法則と結付いてのことではかないのである。<sup>82)</sup>  
 四、何らかの部類クラッセの活動がありさえすれば無造作にひとつの能力を、例えば記憶能力、等々を語りたくなくなる時である。

(82) 法則も実体 (Objekt) ではないが、ここで扱われているのはむしろ、必証的明証を具えていながら常に否定する判断者のことである。言いかえると、語られているのは、必然的に正しいと性格付けられる判断として逆の判断を出すことのできない不可能性だけである。

こうした過ちから免れているならば心の能力についての教説は非難されないどころか称讃に値する。もちろん同じ事実を述べる表現は恐らく別様にも可能であろう。だがその際には新たな表現で法則自体を見失うことの補償に配慮しなければならぬ。この見失って補償のない事態がヘルバルトおよび追隨者には生じているであろう。

だが私には、ヘルバルトの能力分類の欠陥はなお別なる事情に、すなわち心理学的事象の經驗的 (empirisch) 知見の欠けていること、および演繹して構築したい欲望の大き過ぎることに根拠があると思える。

こうして心的現象 (Phänomen) の最も有り触れた性格がすでに誤認される。先述のごとくヘルバルト心理学は、経験がわれわれに当のものについて何も示してくれない多くのものを含むが、心 (Seele) そのものが一例なのである。もとより心はヘルバルトによってもただ推論されるしかない。何ひとつ作用せず何ひとつ甘受しない完全に単純なるもの (Wesen 本質) が扱われているとしてよからう。心が何ひとつ作用しないならば、無論どのように心を

推論すればよいかは解らないままとなる。——他のものは時折われわれの意識に上るのみとされ、表象や表象複合が例である。だが努力や緊張や渴望や感情、外的知覚や内的知覚も同例でないか。厳密に言えばヘルバルトによると、そもそも概念、ことに普遍的概念は存在しない。判断とは、二つの表象を合せる融合化の意識とされる。あるときは意識され、あるときは意識されない、とは、あらゆる思考作用に言えることでないか。

ここから、ヘルバルト教説の大部分は無意識 (das Unbewußte 意識されないもの) なるものの哲学である、と言えよう。意識に上る限りでの、こうしたヘルバルトの挙げる事件 (Vorgang 出来事・事件経過) を調べると、すべては表象 (Vorstellung[en]) である。これら表象を大観すれば、内容から見て下記の部類に区別できる。

一、心とあれこれ他の単一観念 (einfache Idee) との、a. 仲介なしの連合によるか、b. 仲介ありの連合によるかの、(心の自己保存のとき) 直接的単一表象 (einfache, direkte Vorstellung[en])。

二、(直接的単一表象あれこれの融合化による) 統合表象 (Gesamtvorstellung[en])。

三、表象の状態 (Zustand) (状態とは態度そのもの、つまり「努力する」「渴望する」等々) の表象。

意識については、意識された (表象された) 事件 (Vorgang) と意識されない (表象されない) 事件とを区別できる。——意識される事件はさらに、事件と完全に相応する強度を以て意識されるか、この強度が乏しいかに区別できる。

表象作用の「事件と」完全に相応する強度とは、表象作用が生産される際の強度であると思われる。この強度が再生産すなわち反復表象作用には欠けている。

再生産 (Reproduktion) とは、古い部類の想像 (Phantasie) に最も近い事件に他ならない。更新される表象作用すなわち再生産の状態では、単一表象と複合表象とを別けなくてはいけない。

(83) この第四二節では手稿原文を大幅に短縮してある。

四三、表象の再生産 (Reproduktion) および最初に生産された表象と再生産との関係については、ヘルバルトに引続きフォルクマン (Wilhelm Fridolin Volkmann, 1822-1877) が取組んでいる。再生産に対立させるのはただ感受 (Empfindung) だけであるが、この区分は遺漏なしと言えない。フォルクマン唯一の記述的批評基準は生気 (Lebhaftigkeit—Klarheitsdifferenz 明瞭性の過不足) なる基準である。だがこの基準には異論として夢像ないし幻覚の強弱 (Stärke—Klarheitsgrad 明瞭度) を突付けることができる。この異論にフォルクマンは、幻覚 (Halluzination) では再生された表象が感受 (Empfindung) として受取られるかと思う、との答を試みている。取違えは二重の仕方で見るとしてよからう。以前に生じた感受の生気度を身に付けることで、再生された表象が感受の地位を篡奪するか、それとも、再生された表象がまず自分の強さで感受の肉体的 (somatisch) 感受性の土台をみずから築き、つぎにこの肉体的感受性が求心的刺戟として逆に作用、こうして感受を再生に提携させるかである。だがいずれにせよ、あたかも二表象から一表象が成るかという意味では旨く行かず、扱われているのはただ、ひとつの表象作用による融合でしかないと言えよう。フォルクマンによれば残像 (Nachbild) は感受に算えられる。

(24) Wilhelm Fridolin Volkmann, Lehrbuch der Psychologie vom Standpunkte des Realismus. 1. Auflage, Cöthen 1875. 4. Hauptstück. §§ 80, 81, 82.

表象や表象複合にとって想像 (Phantasie (Reproduktion 再生)) の概念は多義的 (äquivok) に曖昧である。感受との相違はとりわけ系統発生的 (genetisch) な相違であって、内的に徹底できる記述的相違はもともと存在しない。相違は精密 (präzise) な相違と見えるが、詳しく調べるとやはり境界が定かでない。

フォルクマンで最も奇抜にして独創的なものは、表象 (Vorstellung) の強さと表象作用 (Vorstellen) の強さと

いう二重の強<sup>(85)</sup> (zweifache Stärke) の説である。この教説からは後代への影響も出た。

(85) 注(84)の書——3. Hauptstück (Wechselwirkung der Vorstellungen 表象の相互作用) さらに続けて4. Hauptstück (Reproduktion der Vorstellungen 表象の再生)。

(86) この第四三節も大幅に短縮してある。

四四、教説を見ればロツツエ (Rudolf Hermann Lotze, 1817-1881) が最もヘルバルトに近いとしてよく、当然ヘルバルト学派ではロツツエをまなしく自分らの学派に算え勝ちであったが、このことにロツツエは精神的に抗議するどころか、重要な多くの点でヘルバルトの体系は自分には廢<sup>すた</sup>れて古く見える、と告白していた。形而上学的な考察に本質的影響を与える傾向によつてロツツエはヘルバルトに似ている。けれども出てきた結果はヘルバルトのばあいほど全面的に悪くはない。表象とは脅迫的な障害に刃向う心の自己保存 (Selbsterhaltung[en] der Seele) のことと見るヘルバルトの思想にロツツエはやはり一定の権限を認めようとする。心の諸能力なるものを否むヘルバルトの反対もまた本質的に称讚に値する、とロツツエは思っている。ただロツツエに過誤と見えるのは、心のあらゆる精神的活動は唯一の根源的活動たる表象作用 (Vorstellen) からの一連の帰結である、との演繹をヘルバルトが試みていることだけである。——われわれはヘルバルトの教説同様にロツツエの教説を、さきと相似た意味で想像表象 (Phantasievorstellung[en]) と語つてよからう部<sup>ツクス</sup>類の位置を確めるのに必要な限りでのみ大観しよう。後期の著作でロツツエは以前より大きくヘルバルトから離れているが、以下こうした後期の著作にわれわれは固執する<sup>(87)</sup>。

(87) これらロツツエ後期の著作は下記の通りである——Medizinische Psychologie oder Physiologie der Seele. Leipzig 1852; Mikrokosmos. 3 Bände, Leipzig 1856-1858; Metaphysik. Leipzig 1879; (学生による口述筆記本)

Grundzüge der Psychologie. Leipzig 1881 ; Grundzüge der Metaphysik. Leipzig 1883.

ヘルバルトは表象作用 (Vorstellen) から表象 (Vorstellung) を分け隔てたが、ヘルバルトによれば、表象されない表象、つまり意識されない表象さえもが存在する。これは矛盾であるとロツツエは見做す。だが実際では両項は決して別々に生じないとしても、両項すなわち、表象する活動が目を向ける内容 (Inhalt) と、この内容を表象されたる相手にする素質 (Fähigkeit、能力) 自体とは、頭「考へ」のなかでは分けることができる。そしてロツツエによれば心的領域全体において相似たことが言えて、「考へる (denken)」と「考へられる相手 (Gedachtes)」、「欲する (wollen)」と「欲せられる相手 (Gewolltes)」、等々は分けることができる。このことで心的活動の内部にはさまざまな種属 (Gattung 亜種) が生起する——。

一、感受する (Empfinden) へと感受 [内容] (Empfindung)。単一の感受 [内容] そのものは、同種部分や非同種部分からの合成が気付かれな何かである。外見の印象によって規定されるし、模像を作れば、これも感受 [内容] となる。感受 [内容] はすべて主観的 (subjektiv) である。色や音が意識内にしか現存し得ないことは、色や音などの本性 (Natur 自然) に根差している。

二、表象する (Vorstellen) へと表象 [内容] (Vorstellung)。第一類との相違は本質的に重要である。感受作用 (Empfinden 感受する) にはみな強さ (Stärke) があり、これは感受 [内容] (Empfindung) の強さに比例して増進し減退する。ところが表象作用 (Vorstellen 表象する) には強さの相違がなく、表象される内容 (vorgestellter Inhalt) にしか強さの相違はない。だが色や響き、等々は現実 (wirklich) としては再生されない。「どれほど明るい光輝の表象 (Vorstellung) も輝きはしないし、どれほど強い響きの表象も鳴りはせず、どれほど烈しい苦痛の表象も痛ませはしないが、それ

にもかかわらず、こうした表象はまざまざと、現実 (wirklich 実際) としては再生しない輝きや響きや痛みを前に置く (vorstellen)」。意識から消えるや記憶像とか総じて表象はもはや存在しなくなるものの、しかしこれらは、ふたたび表象を生む外部の刺戟は必要とせずに再発する。「表象では」徐々に減退などという強度 (Intensität) が与えられていないのであるから、徐々に消えゆくことが起らないのは明かである。表象するときの強度の大小と思違えてしまうものは随伴する感情の強度であって、この感情の強度も表象の経過に影響する。表象する作用には明暗の區別もない。<sup>(87)</sup>

(87) Mikrokosmos. II. Buch. 3. Kapitel; Medizinische Psychologie. III. Buch. 1. Kapitel.

三、関係付ける表象作用 (beziehendes Vorstellen)。この働きでわれわれが捉えるのは相似性・同等性・不同性・対立、そして、あらゆる普遍的概念である。

四、空間直観 (Raumanschauung 空間観)。非空間的な感受 [内容] (Empfindung ことに視覚の感受) に向ける心の反応によって空間直観は成立する。このとき初めて感受 [内容] は経験 (erfahrungsgemäß) として空間内に局在化されるはずである。この空間直観もロッツェによれば、ただの関係付けの所産であると思われる。

五、時間直観 (Zeitanschauung 時間観)。これについては空間直観についてと相似たことが言える。<sup>(88)</sup>

(88) 右の三頁 [三、四、五] についてはロッツェの Mikrokosmos. II. Buch. 4. Kapitel を参照のこと。

六、感情 (Gefühl)。(当り触りのない知覚としての感受 Empfindung とは反対で) 感情とは快不快の状態 (Zustand) のことである。一方では連想への影響によって、他方では自己意識の前提条件として、感情は表象生活 (Vorstellungslieben)

にとつて最高度の意義がある。

七、意志 (Willē)。意志は人間だけのものである。動物にも生じる衝動 (Trieb意向) はまだ意志でない。表象される行動は判定されて、個人的自我から決断 (Entscheidung) が出る。倫理的根柢からロツツエは自由意志論 (Indeterminismus 非決定論) に傾く。これに反することを経験は語らないとするのであろう。<sup>(91)</sup>

さて、われわれの「想像 (Phantasie)」に相似るものはどこにあるかと問えば、もともどこにもない、と答えられるに違いない。一部はささの、単一の感受「内容」と繋がる表象作用 (Vorstellen) のなかに、また一部は、連想法則によつて纏められる表象複合 (Vorstellungskomplex) のなかに見られるかも知れない。心の状態 (Seelenzustand) を表象することも、他人の心の生活 (Seelenleben) を表象することをも、ロツツエは承認している。<sup>(92)</sup>

(90) ロツツエの Mikrokosmos. II. Buch. 5. Kapitel.

(91) 第四四節のためには二つの草稿が援用された。第二草稿は大幅に短縮してある。第一草稿はロツツエで途切れる。

四五、われわれの間との関連でなお他にドイツの心理学者をも手短に語るべきであろうが、わけてもヨハネス・ミュラー (Johannes Peter Müller. 1801-1858) であり、著書『想像による視覚像について (Über die phantastischen Gesichtserscheinungen)』は一八二六年の出版である。年代から見るとロツツエに先立つ人だが、精神から見ればミュラーはロツツエよりも遙かにヘルバルトの考え方から離れている。本来は生理学者であるけれども心的な出来事を研究しているのは、ミュラーにとつて心 (Seele) は生の多様な形式群に入る一箇の特殊形式であり、それゆえ心理学は生理学の一部となるからである。

想像を扱う右の小著でミュラーが徹底的に迫るのは視覚であつて、諸他の相似る出来事には横目を使うだけでし



かない。

とりわけヨハネス・ミュラーの名と結ばれているのは特殊神経エネルギー (spezifische Sinnesenergie [n]) の法則である。<sup>(91)</sup>しかしこの法則は、有機体の作用全般の性格を掴むミュラーの見方の一部でしかない。ミュラーが思うに自然には三種類 (Art) の作用 (Wirksamkeit) があり、それぞれは相互に鋭く区別される。

a. 機械的 (mechanisch) 作用 (変化するものがおのれ固有の品質を移送する)。

b. 化学的 (chemisch) 作用 (二品質が結合して新種の産物となる)。

c. 有機的 (organisch) 作用 (作用を受ける品質がこれに作用を与えるものの種類とは本質的に独立別箇である)。この作用の仕方は有機的反応すべてについて言えることで、感受もここに算えられる。だが有機的反応の独自性はつねに個々別々の刺戟に結ばれているし、反応は当の有機体種属 (Gattung) の内部でしか維持されない。

(92) Gesetz von den spezifischen Sinnesenergien 「特殊神経エネルギーの法則」が語り出されたのは最初は視覚に *ひらびらびら* (Vergleichende Physiologie des Gesichtssinnes, 1826)、後年に一般化された (Handbuch der Physiologie des Menschen, 1840)。

あらゆる感受 (Empfindung) とは本質的に別なる性格がミュラーによれば表象作用 (思考や想像) にはあつて、それゆえミュラーは表象作用 (Vorstellen) を別箇の実体すなわち想像指導体 (Phantasticon) や論理指導体 (Logisticon) の特殊活動として考察する。なるほど視覚や聴覚そのほか諸感官の幻像 (Phantasma-*nen*) は存在するが、こうした幻像は当の感官実体の活動 (Tätigkeit) ではない。もとより視力の幻像は視野内に現れるが、しかし、仮に視覚の活動であるならば、そうでなければなるまい色としてではない。視覚ならば活動方式はここか、しかし実質的に別々

である。ところがあらゆる幻像<sup>ファンタズマ</sup>で活動方式は実質的に同じなのである。これを見れば、存在する感官実体は多数ながら、存在する想像指導体<sup>ファンタズマテイコン</sup>はただひとつとしなければならない。「多種多様なものをも表象しつつ想像 (Phantasie) はおのれの生形式に留まり続ける」。

数多の箇所から証明できるが、想像 (Phantasie) の語で明かにミュラーは、抽象を行う概念的思考作用 (Denken) の活動を考えている。——これと反対に、と信じてよからうが、ふつうに想像の所産と呼ばれる諸他の出来事、なかで最も目立つのは夢魔像とか熱譫妄その他の幻覚だが、これらをミュラーの意味する想像と解することはできない。だがこの見方は正しくないし、少くともいかなる意味でも正しいとは言えない。ミュラーからわれわれの聴くところでは、あらゆる有機的実体のごとく一箇の感官実体は一種属 (Gattung) の生形式しか取り得ず、いかなる刺戟にもこの生形式だけで反応する。そのような刺戟は、当の感官実体と因果的に結ばれている諸他の器官からも到来し得る。そのような因果的結合は想像指導体<sup>ファンタズマテイコン</sup>とあれこれの感官実体とのあいだ、ことに感官実体の内的 (中心的) 部分とのあいだでも生じている。あれこれの感官実体は想像に作用し、想像を鼓舞する。だが想像もまた感官実体に作用し、例えば視覚実体に作用して、このばあい想像によって視野内に生れた形式は色で明るくなる。語の厳密な意味での想像表象とは区別して、ここに現れる外見をミュラーは幻像<sup>ファンタスマ</sup> (想像的感官現出 (phantastische Sinneserscheinung)) と呼んでくる<sup>183)</sup>。

(83) Johannes Peter Müller: Über die phantastischen Gesichtsercheinungen (Neudruck 1927, Leipzig, J. A. Barth). 77 ff  
 ラーの記す phantastische Sinneserscheinung (想像的感官現出) は今日まづには、特にエイドスの天分に発現する Anschauungsbild (直観像) であるを理解される<sup>184)</sup>。ハットした Erscheinung[en] (現出・出来事) と徹底的に取組んだイエ  
 シンク (Erich R. Jaensch, 1883-1940) は二つの形式を区別する——以前に直観されたものを忠実に映す再生の、不動

不変形式 (starre unveränderliche Form—T-Typus) と、直観された像を変えて再生する、運動的再生方式 (bewegliche Reproduktionsweise—B-Typus) とである。下記の書を参照のこと——Erich R. Jaensch, Grundformen menschlichen Seins, Berlin 1929.

いつもの問をミュラーの術語 Phantasie (想像) に向ければ、扱われているのは多義的 (äquivok) に曖昧な表現、ということになる。この語は、本来的な狭い意味では抽象を行う概念的思考作用に用いられるが、非本来的な広い意味では、想像的な感官所産および諸他の想像的な感官現出に用いられる。狭い意味における想像表象と幻想との相違は記述的であり、非本来的な広い意味の内部では相違は系統発生史的ではない。前者では相違は精密であっても、後者では、内外の作用によって成立せる中間形式として輪郭が溶暗的にぼやけてくる。そのさい多くのことが明瞭でないままであつて、ここへは詳しく立入ることができない。<sup>(94)</sup>

(94) この第四五節、ヨハネス・ミュラーについての詳論も同じく大幅に短縮してある。

四六、さきにわれわれは著書『美学入門』と取組んで、フェヒナー (Gustav Theodor Fechner, 1801-1887) とはすでに出会っている。同じく徹底的に想像 (Phantasie) を扱って、きわめて注目すべきことを提示した人である。まずは再度これまでより大きな全体に目を向けなくてはならない。フェヒナーは真先に心的現象 (psychisches Phänomen) と物的現象 (physisches Phänomen) とを別ける——心的現象の出所は内的知覚、物的現象の出所は外的知覚としてである。これではまだ何ら新奇特別とも言えまいが、新しいと見てよいことが心的現象の区分けにあたり登場する。一般の心的現象と並べてフェヒナーが思うのは特殊の心的現象である。一般的現象とは注意

(Aufmerksamkeit) のことであり、われわれが表象 (Vorstellung[en]) を追って、みずから意識に上らせる際に働く自己活動 (Selbstätigkeit) のことである。意志のなかで作用して、われわれに行動する気を起させるのと同じ活動である。「一般的心的現象 (allgemeines psychisches Phänomen)」なる語は、あたかもフェヒナーが、何らかの心的現象が存在するときにはいつでも注意が生じている、と信じていたかと思わせるでもあろうが、これは決してフェヒナーの見方でない。

特別なる現象をフェヒナーは三部類<sup>ケラッス</sup>に別ける——一、感覚的現象 (sinliches Phänomen) 二、表象 (Vorstellung) 三、感覚的現象と表象との中間現象 (Mittelglied) である。<sup>(95)</sup> 第一部類に入るのは感官感受 (Sinnesempfindung) や残像 (Nachbild) や飢え・渇きの<sup>(96)</sup>とき基本感情 (Gemeingefühl) であり、第二部類に入るのは記憶 (Erinnerung) ・想像 (Phantasie) ・抽象的思考に伴う図式 (Schemata) である。第三部類に算えられるのは感官記憶 (Sinnesgedächtnis) や幻覚 (Halluzination) や幻想 (Illusion) である。後には、運動直観につづく反動事象 (Reaktionsercheinung) や記憶残像も同様の中間現象と名付けられる。

(95) 心的現象は下記の書でフェヒナー (Gustav Theodor Fechner. 1801-1887) が詳細に論じている——Elemente der Psychophysik. 2 Teile. Leipzig 1860. In Sachen der Psychophysik. Leipzig 1877. Revision der Hauptpunkte der Psychophysik. Leipzig 1882.

おのずと湧いてくるのは、抽象的思考そのものとは一体なにか、右の区分のどこに入るか、の間である。あれこれの図式の結合のこととフェヒナーは見ているらしい。<sup>(96)</sup>

さらに、奇妙な中間現象とは何か、どのように他の部類に関するのか、と問われるであろう。第一部類に入るのか

第二部類に入るのか疑わしい現象が問題であると見える。だが後段この関係ではフェヒナー自身が明確な決断を下して、これによれば、記憶残像はなお第一部類に、諸他のものが第二部類に入っている。<sup>97</sup>

(96) Fechner, Elemente der Psychophysik, II., S. 468.

(97) Fechner, Elemente der Psychophysik, II., S. 467f., Revision der Hauptpunkte der Psychophysik, S. 8.

フェヒナーが意識されない感受とか表象などを語るのは稀でない。ヘルバルトと同様に意識されないものの哲学を予期していたのもあるうか。決してそうではなく、全く別のことを思っていたのであり、フェヒナーにとって「意識されない (unbewußt)」とは、気付かれるか否かの境目 (Schwelle des Bemerkwerdens 識閾) の下に横たわっている、ということである。このことは以下の詳述で明かになろう。

心的現象と物的現象とはきわめて異なるが、それでも双つの領域間には法則的な関係ないし依存事情が存在する。心的現象はいずれもみな精神物理的 (psychophysisch) に基礎付けられている。わけでも注意 (Aufmerksamkeit) の根柢には精神物理的運動があり、この運動が一定尺度以下に沈むと注意なる心的現象は消える。精神物理的運動のこの尺度 (Maß) が注意の境目「識閾」である。

あれこれ他の心的現象では事情はもっと複雑になる。こうした事情が登場するためには、わけでも、当の注意なる現象の根柢を成す、もしくはは (これまでより強さを増して)、成すことになろう精神物理的運動の確かな尺度の存在することが必要である。さらに、注意と精神物理的運動とのあいだの例と同様に、あれこれ一層特別な現象とかかわる精神物理的運動が現存しなくてはならない。したがって現象の強さ (Stärke) はいつでも精神物理的運動の関数 (Funktion) である。心的現象の各々が実現するためには精神物理的運動の確かな尺度が必要である。別言すれば、

ここにも気付かれるか否かの境目「識闕」が存在する。

さて二つの前提条件が求められるので事態はさらに複雑となる。ただ、一つの境目だけでなく、各箇それぞれの事例で別々にと、いわば無数の境目が存在するのである。というのも、注意がより大きくなれば相手となるものの精神物理的運動はさほど強い必要なく、逆に、精神物理的運動の方がより大きくなれば注意は小さくても十分だからである。

これ以上詳しい批評に踏込むつもりはないが、この注意理論 (Aufmerksamkeitslehre) は怪しく思える、という評語を押えることはできない。注意とは何かと言えば、これの向う特別な現象を相手とする一般的なる心的現象と見よ、とある。呼応して「当の現象に向けられる注意の感情は、性格はつねに同じままだが、強さ (Stärke) や強度 (Intensität) だけが変り得る」と言われる。ここに私は正反対の事を見出す。この現象あの現象へと向うごとに注意が別の注意になるのであれば、注意はみずから内的相違を担っていて、相手たる現象の変化につれて変るのでなければならぬ。

現象の第一部類と第二部類つまり感覚的現象 (sinnliches Phänomen) と表象 (Vorstellung) との別は何によるかと問えば、自身の経験と他人の経験とを丹念に比較してフェヒナーは、双方の根柢に横たわる精神物理的経過の本質的差異によっては区別できない、との結果に達している。けれども強度の相違 (例えば記憶は元の感受より弱い) はあろうと言ひ、さらに自発性の感情 (記憶や想像表象には、それぞれから生じる感情が附随する) もあろうと言う。双つの現象部類が位置付けられるところは脳の別々の部分であつて、このことは注意の方向に認められるであろう、としている。

他にも多くの繊細にして機知溢れる所見がフェヒナーの教説全体を説得力あるものにしてゐる。再度大観すれば、

Phantasie (phantastische Erscheinungen なる想像上の出来事) なる術語は、ヨハネス・ミュラーとは別様の仕方なれども、用い方が多義的 (equivok) であると解る。感受と表象との相違は記述的にはほとんど明示できない。というのも、この区別は本質的に、どこにあるかという位置付け (Lokalisation) の区別だからであり、精密でなく溶暗的に霞んでしまうからである。<sup>(98)</sup>

(98) 第四六節も手稿原文を大幅に短縮してある。

四七、兩人の見方を最後に論じたが、これら二人の研究者ミュラーとフェヒナーの焦点は概ね自然科学にあったし、ときに哲学的疑問への格別魅惑的な興味が湧き、限界を越えて目を心理学へと向わせただけのことである。

なお他に相似たことは多かれ少かれ、フランス人フルランズ (Marie J. Pierre Flourens, 1794-1867)<sup>(99)</sup>、ヘルムホルツ (Hermann Ludwig Ferdinand von Helmholtz, 1821-1894)、ヘーリング (Ewald Hering, 1834-1918)、マッハ (Ernst Mach, 1838-1916)、マイネルト (Theodor Hermann Meynert, 1833-1892)<sup>(100)</sup> 等々の研究者についても言える。けれどもこうした人々を顧みる気にならないのは、想像 (Phantasie) のことは全く語っていないか、語っていてもごく曖昧な仕方ではないからである。例えばマイネルトは、想像表象とこれに関る感受とのあいだには記述的相違を認めて、後者には残像および幻覚をも算え入れている。ただの強度差で済む相違でないと言うのである。われわれには新たなことが見出せず、これ以上これら研究者のもとに立止る理由もない。

(99) Marie J. Pierre Flourens (1794-1867)、フランスの生理学者で、実験的脳生理学の創始者。

(100) Theodor Hermann Meynert (1833-1892)、ウィーンの精神医学教授で、当時の生理学的脳研究に解剖学的基礎を与えた人であり、精神障害を脳疾患として捉えた。

四八、ただし一人だけ例外としなくてはならない。もともとヴント (Wilhelm Wundt, 1832-1920) も自然研究者で哲学への関心は久しく片手間のことでしかなかったが、後年には哲学を本来的職務として選び、数多く広汎な哲学的著作によって影響力の大きい人となった。わけても「版を重ねた」著書『生理学的心理学』は畏敬すべき印象を多くの人々に与えてきた。自然科学の方法での心理学促進を課題とする書である。心理学的観察でなく精神物理学の実験を認識の主要手段にしなければならぬと言う。無論そのとき目に付いて、最初から疑わしいと思わせるのも尤もであろう一点は、ヴントが、全く新たな道を行くとしながら、直ちに心理学的真理の全体系を提供できると信じていることである。

実際にも示される通り、ヴントの研究によっては何ひとつ明瞭にならなかった。最も簡単に初歩的な心理学的問題について著者は、付言すら書添えずに矛盾この上ない主張を立てている。沢山の見慣れぬ術語が導入されるが、伝統的な術語は意味が変更されたことである。その際しばしば当の術語は、すでに長いあいだ用いられて後によりやく定義されたり、あるいは、もとより最も安易なことなれど、誤解を招きかねない表現では断じて許されないことなのに、例えば意識とか意志の語が、これらの表現は定義不能と説明されたりする。生理学的問題ではヴントは、例えば特殊神経エネルギーの否定や神経に属する中心部分の否定など、最も鋭い刷新を試みている。これや他のあれこれ奇妙な主張については詳しく踏込むまでもなからう。

私は、ヴントにおける Phantasie (想像) の位置についての特別な考察にあたり、このように予め著書の特徴を全般的に見て置くことが役に立つと考えた。<sup>(10)</sup>

(10) プレンターノは原文(第二章稿)ではヴントの教説をとりわけ詳しく扱っている。というのも、まさしくプレんター



ノが自身のこの「心理学および美学についての講義」を行っていた同じ時代に、ヴントの教説がオーストリアでも多大の影響力を得ていて、当時ヴントの著作は高等学校 (Mittelschule ドイツの Gymnasium) 教師にすら研究材料として特に薦められていたからである。けれどもプレントナーはヴントの教説を矛盾に満ちて人を惑わすと見た。そのうちヴントの影響は完全に下火となったので、ここ本書ではただ肝要なことしか際立たせていない。

ヴントでは想像の語を広狭二重の意味で用いているのが見える。狭い意味では精神的素質 (Anlage) を扱うところであり、想像は記憶力 (Gedächtnis) および理解力 (Verstand) と一緒に置かれる。理解力活動が概念 (Begriff) を借りての思考作用であるのと同じく、想像活動とは図像 (Bild) を借りての思考作用のこととしてよからう。この箇所では思考作用として諸々の表象の統覚的結合作用 (apperzeptives Verbinden) が理解されるが、図像として理解されるのは感覚的生気ある一箇の直観的個別表象 (anschauliche Einzelvorstellung) である。他方の広い意味では、ヴントは、全般的分類において諸々の知覚と並置するところで想像 (想像表象群 Phantasievorstellung[en]) を語る。この見方こそがわれわれには問題である。

ヴントによれば、心のあらゆる状態もしくは意識のあらゆる状態は二つの活動から成っている——一、感官の活動 (Sinestätigkeit) すなわち最も広い語意における表象 (Vorstellung) と、二、統覚の活動 (Apperzeptionstätigkeit) 元来これだけが活動の名に値する」とである。

統覚の活動とは快・不快であり、気付く、努力する、意欲する、行動する、などの働きであり、それゆえ表象の活動 (Vorstellungstätigkeit) にはきわめて多面的な意義と大きな影響力とをもっている。このことで (また他のことでも) 統覚の活動はフェヒナーにおける注意 (Aufmerksamkeit) の役割を思出させる。統覚の活動はたんに表象

に関して気付いたり感じたりすることだけでなく、表象間に結合や分解を引起すのだが、この結合や分解は多種多様であり得る。当然この仕方方で判断や抽象的概念も成立するのである。さきに語った狭い意味における想像形像(Phantasiegebilde)もこの(能動的 aktiv) 統覚的な活動の作物に属している。

感官の活動すなわち最広義における表象は感受(Empfindungen)か、もしくは本来の狭い意味での表象である。感受が掴むのは当然われわれの、これ以上には簡単に分解できないという意識の状態である。そのような状態をわれわれは決して生起させていないとヴントは告白するが、しかしこれを「あらゆる内的経験の合成された本性から(aus der zusammengesetzten Natur aller inneren Erfahrung)」明証あるものとして推論できると思っている。

他方、本来の狭い意味での表象が掴むのは「われわれの意識内で感受が絶えず結ばれてゆく、多かれ少かれ合成された形像(die mehr oder minder zusammengesetzten Gebilde, zu denen sich stets die Empfindungen in unserem Bewußtsein verbinden)」である。このあと、あれこれの表象や主要部類<sup>クラス</sup>について聴かされ、あらゆる(狭い意味での)表象が知覚や直観と想像表象とに別けられることで、そのような主要部類のひとつとして現れるのが想像表象(Phantasievorstellung)である。知覚表象では表象の対象は現実(wirklich)の対象だが、想像表象では思考(gedacht)された対象であることが相違とされる。さらに、想像表象に属するのは幻覚(Halluzination)であり、夢魔像(Phantasma)であり、ふじうの記憶像(Erinnerungsbild)である、と言われる。知覚との区別は、覚え込まねばならぬ徴候(Kennzeichen目印)によって生じること、とされる。個々の点で、知覚表象および想像表象を語るヴントの教説には難点や矛盾が見られるが、ここで詳しく扱うことはできない。なお、これまでの事例でも出した間に手短かに答えよう。想像の語はヴントでは一義的(univok)に用いられる。想像表象と知覚表象との相違は主として系統発生的(genetisch)相違である。語義はヴントでも精密(präzise)ならず、溶暗的<sup>ambigü</sup>にばやけてしまう。これを以て、Phantasie(想像)

なる術語の使用についての考察は閉じることにした。<sup>(10)</sup>

(102) 第四八節に要約したヴントの教説は主として下記の書に見られる——Grundzüge der physiologischen Psychologie, Leipzig 1874 (5. völlig umgearbeitete Auflage, 3 Bände 1902). 想像についての言説は右の第五版下記の箇所にもある——III. Band, 5. Abschnitt, 113-119. Kapitel.

四九、みずから立てて、いまなお解けていないわれわれの課題は Phantasie (想像) の概念規定である。想像とは心理学にわれわれが新たに導入する術語でない。われわれは伝統を顧慮しなければならなかったし、そのさい人々の用法をも研究者の用法をも知りたいと努めた。このことは多くの者には回り道に見えようとも、今後のさらなる努力のためには、やはり実質的な助成となつてゐる。すなわちいまやわれわれには、これまでのあらゆる事例に共通なるもの (das Gemeinsame) を究明することが可能になつたのである。

a. 一体そのように共通なるものはあるのか、ないのか。あると認められるならば、どこにあるのか。

β. さらに吟味を要するだろうが、伝承されてきた用法は、一語についてであれ一部類の用例についてであれ、これに忠実に従うままがよろしく、義務でもあるのか。それとも自然な有るがままの枠が伝承されてきた語の枠と合わないからには、離れよ、と命じられているのか。

ここでいまやわれわれには、先立つ研究者たちの部類分けの試行が下拵えとなつて、あれこれと利用できるが、無論こうした先達の權威に縛られてはならない。

まず、共通なるものはあるのか、という第一の問への答を試みよう。ここでは以下のごとく言える。

a. 想像 (言いかえると想像表象 Phantasievorstellung) は最も広い意味における表象 (Vorstellung イメージ) として受

取られること、すなわち想像は表象イマージュの一本根部類アンタゴニスムを成していること——このことが共通なるものとしてわれわれには見える。ほとんど誰もが判断 (Urteil) は想像の領域に算えない (すでにアリストテレスが例である——*de anima* 「聽見ならず」) のが特徴的だが、しかし意志 (Willie) や激情 (Affekt) も想像には属さなご。

b. 他方で確実なことだが、表象のいずれもが想像に配分されるのではない。ことに普遍的で抽象的な表象は想像に属さないとされる。また (例えば矛盾し合う表象のごとく) 直観的ならぬ概念的構成体も想像には算えられない。

c. だが直観的表象でも対立させられるものがあり、知覚表象 (Wahrnehmungsvorstellung) は想像表象でない。この対立を哲学者は繰返し強調する。早くもアリストテレスがあり、これに従う研究者群がいるが、例えばジョン・ステュアート・ミルのごとく多くのイギリス人も同様であり、ドイツ人では格別ロツツェにヴァントである。

d. だがこの「対立なる」契機がますます重々しく目立つのは、想像表象がまさしく (相似性に比例して) いわゆる知覚表象と近い親近関係に立つからである。想像表象が知覚表象のように具体的 (konkret) でないか、などと言われるのである。しばしば想像表象は、都合次第で知覚に取替えることのできる模像 (コピー) と呼ばれる。さよう、この事情こそが「想像なる」呼名の成立に影響したのかも知れなご (*phantasma* = *scheinen* 「…と見える」)。

そう思えることを完全に判然とさせるためには、もとより知覚表象の概念の解明が必要であり、ここへ立戻らなくてはならないであろう。

e. だが前以てわれわれは、想像表象を性格付け、これを一緒に似た表象のなかで際立たせるものは、否定的規定以外に何もないのか、と問いたい。

想像表象をアリストテレスは知覚表象の残響として、すなわち知覚表象を生む生理学的過程の残響として考察した。もしかすると、このことは想像の概念に入り込むのか。——入り込まないことは確かである。

どこにでもあるとしてすら両表象の連関はしばしば極めて間接的 (indirect) な連関である。先立つ過程は新過程への傾向を残しただけとして、とにかく新たな過程を引き出す直接的 (direct) 原因が存在しなければならぬ (想像表象の産出には多くの人々が善霊悪霊の作用を信じた)。

f. 想像表象をアリストテレスは *αἰσθητικὴ ἀνάγκη* (弱い知覚表象) と呼びましたが、こうして「想像表象の」内容の全般的特性を説きたかったとしてよからう。だがこの全般的特性が想像と算えられるものについても存在するか、きわめて疑わしく思える。存在すると仮定してすら、この特性によるのでは、やはり「想像表象の」概念の画定されないことは確かである。

g. 想像とは再生産 (Reproduktion) のことと多くの人々が説いてきたが、通用している「想像の」概念とは、なおさら合わないように見える。

a. 内容があらゆる点で再生されるのではないことは確かであり、例えば強度について大抵は相違が存在するし、形態や品質もさまざま微妙な<sup>ニュアンス</sup>差異を示す。また、きわめて多くの研究者からは無視されたが、特定瞬間の特殊性も顧慮すべきであろう。

β. さらに、そもそも「再生された (reproduziert)」とは何かと問いたい。もう一度生産されたということか。

とすれば、再生産とは知覚表象なりとして何ら苦情はなからう。思っているのは似た表象だけで同じ表象でない、と言うならば、反論して、言われる規定は想像表象が以前の表象に似ているところでも当嵌るが、せいぜい認められるのは、ここでは以前の表象と後の表象とのあいだに何らかの因果連関が成立つ、というのも以前の表象を相似た後の表象が成るための傾向と呼べるからだ、ぐらいのことではなからう。先刻すでに論じたことであるし、このことは想像の概念に入り込まないと見届けてある。

γ. 無論はるかに深い本来の意味での再生産を教える多くの心理学者、わけてもヘルバルト学派の人々がいる。ひとたび生じて真に終りとなりはせずに意識の境目で沈んでいた表象を、ふたたび同じ（そして内容的に当然ながら全く等しい）表象として甦らせる、と説くのである。だがこの教説を控えさせる疑惑は重々しい。しかも仮に教説自体は真であらうとも、真であることについて一般の人々は何も知らないし、想像なる語の伝統的用法はここでは何の関りもない。

h. 想像表象と知覚表象とを別ける契機としては他にもなお挙げられてきた。だが両表象は領域全体の拡がりでは重なりはせず、古い概念に接しはしない。例えば表象作用の強度と表象対象 (Vorstellungsgegenstand) <sup>(10)</sup> の強度との不均衡を多くの人々が想像 (Phantasie) にとつての特徴と見るばあいである。これはヘルバルト心理学にとつてのこととしてよいが、他にも多くのことが関連ありとされるであらう。例えば想出のなかでの砲声の強さと自分の声との比較であり、さらには想像表象が気になるさいの顕著性 (Merksichkeit) と、きわめて弱い感受がなかなか気にならない非顕著性 (Umerklichkeit) とである。だがこうしたことは、ただ幻覚 (Halluzination[en]) を思うだけでよいが、何ら区別をさせるものでありえない。したがって全く別の区分け (Gruppierung) に導かれることにならうが、これによれば幻覚、等々は区分けの境界外に落ちることにならう。

相似たことを言えるのがロツツエの、総じて表象する活動に強度の区別はなく、その種の区別はただ表象される対象にしかあるまいが、感受する活動にはそれぞれの強度があらう、という教説である。

(103) ここで、またこれ以後もブレントラー後年の用法に従って、別なる研究者の表現を再掲するのなければ「内容 (Inhalt)」の語は「対象 (Gegenstand)」に置換えてある。

i. 他の人々の主張では、「想像する (phantasieren)」とは同じ対象への一つ別なる関り方である。肯定する、否定する、という判断作用においてと同様、表象する、という作用の内部にもあれこれの特殊態があるうと言われるのである。(この見方は、さまざまな意識関係を扱う私自身の心理学に影響されて成立と思われる。) けれどもこの主張は、正しいか否か疑問であるし、古い概念を相手とする完全な更新ということにならう。<sup>(104)</sup>

他の人々がはつきりしない言い方で、ただし何か本当は別なことを語っている場合もここに入る。

(104 後にブレンターノは確かに表象あれこれの様態 (Vorstellungsmodi) を導入したが、時間差 (temporale Differenz [en]) も *modus rectus* (直接態) と *modus obliquus* (間接態) との区別 (前掲著書参照— *Psychologie. II. Anhang III und IV*) も「知覚する (wahrnehmen)」と「想像のなかで表象する (in der Phantasie vorstellen)」との相違の説明には呼込まれない。

j. 知覚表象とは (想像表象と区別されて) 根拠をわれわれの感覚器官の刺戟にもつ類の表象のことである、との規定も同じく、知覚表象の本来の概念と合わないであろう。内的知覚が排除されていることにならう。

k. 想像表象にはつねに、これを掻立てる心的先行原因がある、と言いたくなくとも、決して正しいことにならう。記憶表象 (*Gedächtnisvorstellung*) さえもが心的な影響次第で即応的 (*unmittelbar*) に掻立てられる。

五〇、こうしてわれわれの考察の結果は以下のごとくなる——想像表象は知覚表象に相似る表象なれども、しかし知覚表象でない。想像表象は知覚表象に似れば似るほど、益々それだけ想像表象の名に値するのである。<sup>(105)</sup>

このことが、当面の領域全体内で生じていると思つてよからう、共通なるものである。だが「想像 (Phantasie)」概念の完全なる判明性 (*Deutlichkeit*) のためには、すでに述べたことだが、なお知覚表象の概念を明晰にすべきで

あろう。知覚でないものがしばしば知覚と思われはしなかったか、もしくは逆に、真の知覚が見落されたのでないか、とさらに研究すべきであろう。

このことと関連するのが、語義に固執して語用の範囲はできるだけ正しく掴まえさせたいのか、それとも、あまりにも輪郭が溶暗的にぼやけてゆくの語義を廃したいのか、当の術語の運命についての決定である。<sup>(106)</sup>

(105) いかなる意味において知覚表象と想像表象との同索性 (Gleichheit) ないし相似性 (Ähnlichkeit) を理解すべきかは後段 (第五一五九節) で説明される。

(106) 第四九節と第五〇節の手稿原文は極くわずかに短縮しただけである。

五一、まずは問いたい——知覚 (Wahrnehmung) とは何か。

「未了」



『美学綱要 (Grundzüge der Ästhetik)』(一九五九年)

内容概観 (Inhaltsübersicht) [承前]

一 心理学および美学の選り抜きの疑問

二九、美学にとつての意義が最も大きいのは心理学に属する想像力論である。想像を扱うには表象生活の研究が前提になる。ところが表象生活の記述 (Beschreibung; Deskription) においても説明 (Erklärung) においても、われわれが出合うのは多大な不一致である。

三〇、内的知覚に誤りのないことがやはり記述の正しさを保証するに違いない、という異論は却下しなければならない。なぜならば、心的現象の記述に動員されることのすべてが内的知覚に算入されはしないからである。――また内的知覚内に入り込む事柄も、すべてが気付かれ (bemerkt werden) はしない。

三一、この気付かれないままということから、われわれの心的現象を記述するさいに生じる隙間は説明できる。一連の事情がさらに誤謬へと導く。

三二、記述心理学を今日まで妨げてきたのは習練の不足、方法の不足、分業の不足である。

三三、想像力 (Phantasie; 想像) についての研究は概念規定を求めている、しかもまず吟味すべき要事は、この語は伝承された術語なのか、それとも新たに導入された術語なのか、ということである。

- 三四、想像「力」は伝承された術語であり、われわれは、通常語としての用法には術語と共通のものが根柢にあるのかと  
 確めなくてはなるまい。
- 三五、考慮したいのは日常生活での使用例と研究のさいの使用例である。——日常生活で Phantasie (想像) の語はほと  
 んど Phantasievorstellung (想像表象) という意味で用いられる。想像表象は他の表象から区別される。
- 三六、どれほど個々には相違があろうとも、やはり共通のままであるのは、表象でないものは Phantasie (想像) と呼ば  
 れないことと、感受ないし知覚表象も抽象的概念も想像表象には算えられないことである。
- 三七、想像表象について日常生活でことさら語られるのは、当該事象 (Erscheinung[en] 目に映る外見) が外的知覚に似て  
 いるばかりである。
- 三八、研究者による術語使用を調べるさいに注意すべきは、当の語の全使用例が顧慮されたか、当の語を一義的と見てい  
 たか多義的と見ていたか、精密と見ていたか溶暗的と見ていたか、また記述的と系統発生史的との区別は立ててい  
 たか、ということである。
- 三九、早くもアリストテレスに Phantasie (想像) なる表現を見出せるが、しかも現前する感覚的客体の作用なしに表象  
 が成立つばあいのこととしてである。想像表象の記述的徴表としては、とりわけ強度と生気の、より乏しいことが  
 挙げられている。アリストテレスの教説は、この語の日常生活における用法と実質的に合致する。
- 四〇、スコラ学者たち、わけてもトマス・アクィナスはアリストテレスの教説と大幅に繋がっている。
- 四一、より大きな自立性は近世で示される。デカルトはまだ多くの点でアリストテレスに随っていた。ロックはわずかに  
 しか想像表象と関っていない。デーヴィッド・ヒュームは強度の相違を強調した。ヒュームの教説の不明瞭なところ  
 は、物的現象と心的現象とを混同することと、心的現象のアリストテレスによる根本的分類を放棄していることと

に関連する。相似たことがジェームズ・ミルの教説についても言える。感知 (sensation 感受・知覚表象) と観念 (idea) にここに想像表象も算えられる) との境界区分は系統発生史的である。アレクザンダー・ベインは、観念とは更新された感知のこと、ただし強度のより乏しいのが特徴である、と解している。J・S・ミルによれば、知覚表象と観念とのあいだには系統発生史的な相違もあるし強度の相違もある。

四二、近年のドイツ哲学者ではヘルバルトが一種の無意識物 (意識されないもの) 哲学の創始者である (例えば表象されない表象について)。想像は再生産、再表象作用と解される。いわゆる精神能力論は、正しく理解すれば危険のないものだが、これをヘルバルトは全面的に斥けている。

四三、フォルクマンはヘルバルトの表象の再生産なるものを受継いで、これは単一表象および表象複合に関するはず、と見る。想像表象と感受との相違はフォルクマンによれば系統発生史的な相違である。

四四、しばしばヘルバルト学派に算えられるロツツェは多数の心的現象を挙げている。ロツツェによると強度の相違が存在するが、これは表象する作用そのものでなく、表象される内容だけに帰属させるべき相違である。ただし当の内容はもとより再生産されはしない。というのも「最高度に明るい輝きの表象とて光り耀くことはない」からである。ロツツェによれば想像表象は、あるものは単一の感受と繋がる表象に、あるものは連想法則によつて纏められる表象複合に算えるべきであることになろう。

四五、ヨハネス・ミュラーによると、表象作用に属する性格は、感受に属するのとは本質的に別なる性格である。想像表象なる術語をミュラーは多義的に用いていて、狭い意味では抽象を行う概念的思考作用のこと、広い意味では、いわゆる想像子 (仮説として想定された実体) の特殊活動とミュラーが見做す想像的感官現出のことである。

四六、フェヒナーによれば、心的現象と物的現象とのあいだでは一定の依存関係が支配している。いかなる心的現象も精

神物理的に基礎付けられている。注意は最も普遍的な心的現象であるが、基盤として一箇の神物理的運動をもつ。この運動が一定度以下に沈むと、当の現象は消える（注意闕）。想像表象は、強度の乏しいことによって、また自発性の感情によって、諸他種類の表象とは区別すべきであり、位置付けられるところは脳の別部分にあるとしてよい。四七、ほかにフルラース、ヘルムホルツ、ヘーリング、マッハなど哲学に心を寄せる近年の研究者は、想像にはほとんど関っていない。マイネルトは想像表象と感受とのあいだに、ただの強度差でない記述的相違があると想定している。

四八、ヴントは想像 Phantasie（すなわち Phantasievorstellung 想像表象）の語を狭い意味と広い意味とで用いている。狭い意味では想像とは図像を借りての思考作用ということになるうし、広い意味では想像は知覚と並置される。ただし表象作用の対象が、知覚では現実的对象、想像表象では思念的对象である、と言う。

四九、この短い歴史的概観は、術語 Phantasie（想像）を用いるとき何か共通なるものがあるのか、どこにあるのか、そしてわれわれは伝統に忠実に従うままでよいのか、という問に答えることを可能にしてくれる。共通しているのは、想像活動は表象の領域内に算えられる、ということであるが、表象のいずれもが想像表象であるわけではない。想像表象に属さないのは抽象的非直観的表象と知覚（感受）である。とはいえ想像表象と知覚とは密接な親近的關係にある。しかし、このことについての積極的規定として提出されたものは、不確かで普遍妥当的でないと思われる。

五〇、想像表象は知覚表象と相似る表象である。

五一、知覚とは、何か表象される（知覚される）ものがある、という即応的認識のことである。

「未了」